川柳雑誌

麻生路郎★編輯

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十二年七月一日發行　第十四卷第七號（毎月一回一日發行）

NO. VII VOL. XIV

推奨　林醫學博士
監査　瀬醫學博士

ワダカルシユーム錠

安産のために

母性愛の結晶へ

母性愛の發露たる姙娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシユームの使命であります。即ち母体と胎兒の保護榮養に任じ、悪阻期を安全に經過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめますからお産の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豐富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髪、齒牙の悪化を防止し、乳兒も隨つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。

片瀬醫學博士述「安産のために」進呈

代時ムーユシルカ
てし設建を

茲に二十年、幾十萬の姙産婦諸姉が、「ワダカルシユーム」の偉力を禮讃せられつゝある事實と、我國カルシユーム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀬博士の、二十年一日の如き熱意と努力により、不滅の城域を築き得ました事は弊店最大の誇とする處であります。

安産！安産！安産のために
「ワダカルシユーム錠」

大阪道修町　和田卯助商店

川柳雜誌
第十四巻　第七號

微風

麻生葭乃

さくらんぼ頸の細さに似る乙女

眼とづれば人はみな善人なるぞかし

屋根看板の裏に座つて初夏の風

セレナーデ百合の匂ひに包まれて

二階から見れば色街めく射的

ある日店で迚もおしやれな仙人掌を見た

川柳雜誌　七月號目次

題字・路郎筆

文苑

川柳名句評釋……麻生路郎…(一〇)

異國に住めば……小倉圓平(文)…石原青龍刀(句)…和田默然人(句)…(一二)

武玉川三編研究（七）……梅本秋の屋　森東魚…(一九)　蛭子省二

雨と風……福田山雨樓…(二二)

桃太郎序曲……石會根民郎…(二四)

うちの猫を中心に（川柳指導講座）……塚越正光…(二五)

武玉川三編研究を讀む……頴原退藏…(四一)

漫畫セクション

坊やの機轉！……小川武

現代娘氣質……甲貝スミ男…(三三)

キャンプ異變……北幹夫

行路集（短歌）……長野晴濱…(二四)

幻影はめぐる……麻生葭乃…(二三)

喫茶店のAとB（職業川柳人問題）……(三四)

北陸より……安川久留美…(一六)

青空の下の句會……(二〇)

子供と共にあれば……石崎柳石…(一三)
話……石田沐天…(一六)
川・協・の・頁……川柳人協會…(二三)
柳人素描……(一)前田五健君…(二)安川久留美君
牡丹……宮岡白峯…(一七)
ある日の一斷面……麻生路郎…(一七)
川柳横町……不死鳥…(一八)

創作

微風……麻生葭乃…(一)
川柳塔……綠雨、鮎美、丹路、夕鐘、青兒、民郎、八步、變人、ライト、古弗、新水、沒食子…(三七)
いわを、白峯、機見女、柳秀、可宵
近作柳樽……麻生路郎選…(四)

日本名所名物川柳(京都の巻)……山川紫明選…(一八)
朝賀大鱗畫

一路集
退社……前田雀郎選…(四四)
夫人……住田亂耽選…(四五)

各地柳壇……(四八)
柳界展望……社關係の人々…(五四)
柳誌要目……川・雜・案・內…(五五)
編輯縱橫……(五二)

近作柳樽

麻生路郎選

ヘッドライトが照らしたとこ馬の糞　大阪　柳大門

社會學の一年生が猪口をうけ　同

見付かつた十錢を食ふ荷造場　同

氣狂ひとだんゞわかる債券屋　同

みな様の食堂にけふ休まれる　同　山本三巴

損をせぬ程度の店を次男出し　同

鮎送る籠にも夏の色を見せ　同

メガホンはシャツをまくつて握る物　同

救からぬ病人がゐて春蠶　今治　月原宵明

農繁期藁の中から人が出た　同

落選の本人だけが眠る部屋　同

教科書に金の尊さ書いてない　同

ほろ醉つて植木へかゞむ妻楊子　廣島　濱田久米雄

交番所夏にば夏の花が咲き　同

酒が出るまでを轉宅使はれる　同

制帽をかしげちろりの湯氣に寄り　同

陽の下の煙の下の大阪よ　尼崎　酒井　斗風
精力が足らぬかうすき髭をおき　同
美しい戀も知つてるけし坊主　同
もう家が建つのかダリヤ赤く咲き　同
僞らぬ姿ストロー捨てゝ飲み　大阪　山田　菊人
あの窓の灯消えず雨になり　同
クラブですかレートですかに値を訊ね　同
松竹の株を手離す子が生れ　同
人事欄女房へ訛る記事となり　同　石田　沐天
ポリスマン情け知らずと罵られ　同
虚榮の果は上海の暗に生き　同
ランデブー草の命が順に絶え　同
使はれる事考へる學校出　今治　長野　文庫
古本屋あたかも讀破せし如し　同
重役の前に男の媚を見せ　同
女湯の聲が大きい鰯の値　金澤　森田　白林
鐵骨へ大東京の天の川　同

心臓はこゝよと女給寄つて來る　同
家計簿に追駈けられてゐる妻よ　長野縣　金井有爲郎
鍵をあづけられて嬉しく思ふなり　同
移轉して釘と金槌たのしめり　同
話好き鐵の饑饉にまで及び　神戸　西村　明珠
入墨を消す術もなく俥引き　同
定期券彼女の後を追ふやうに　同
ダットサン羨やむ中を通り抜け　大阪府　黒川　紫香
雨上り一歩みごと蛙逃げ　同
ニコリともせずにボーイはコーヒ呉れ　同
習性の揉手に黑き制服や　兵庫縣　林　朔風
捨鉢となる切札をもつ女　同
團體の旗が圍んだ街の事故　同
繪はがきを買うて出すとこ考へる　大阪　北川　春巣

英國戴冠式畫報に寄す

僧正の丈伸び戴冠式はすみ　同
春の風空巣狙ひが捕へられ　同

俯向いて女は別に悪怯れず　同　山本　葉光
しのぎよくなつて炭屋の愚痴を訊き　同
迷はずに成佛せよとはむごい事　同
義捐金商賣敵の額を見る　長野縣　林　幹
夢に見た道は墓地へと續いてた　同
プログラム貰つて春を病んでゐる　大阪　永並佐一郎
名譽慾少さい活字にもならず　同
出世していまだに殘るバスケット　同　古寺七五三二
夏服の巡査上衣を脱いで畫　同
氣の弱いヒョコやつぱり食ひおくれ　今治　荒井英賀夫
日曜日ヘヤアイロンが燒けすぎた　同
手酌手酌唄ふて居るは土蛙　松山　矢野蛇の麿
それも理屈ぢやとさとりなさい　同
惡友が乘つた電車を追ふペタル　大阪　庄司淡路坊
角砂糖儲かりそうな話なり　同
青空を讃へる握り飯の味　京都　福田　丁路
吊皮を死守する樣の哀れなり　同

信じ切つたる膝の丸さよ　大阪　八田　鐘生
其れ程にしてまで嫌らはれに出掛け　同
子の寢顔見て內職の座に戻り　同　今井　菊路
電燈をメートルにして暗う住み　同
急用のペンがはしつてゐるもよし　大阪府　宮岡　公子
白米も騰り鰯もあがる春　同
表札に其家の個性見せてゐる　臺中　宮內　耕朗
波頭女の裾をあわてさせ　同
連絡に遲れて家出氣が變り　今治　石手　河鹿
もとの座へかけて散髮賃を出し　同
自轉車の無い子あとからかけて來る　大阪　千草　豊
よく喧嘩するんですよとのろけられ　同
壺の百合開かぬまゝに萎れたり　同　大阪　形水
汐きやまぬ子を抱いて出る午前二時　同
逢へぬ夜の淋しさ星がちりばめる　山口縣　三原　狂路
嘘を言ふまでを女の美しい　同
父の留守ヒョコ座敷でゐをひらひ　大阪　岡田　玻瑠

日向ぼこヒヨコに足をつゝかれる　同
終電車働らくとこをたづね合ひ　同　岩橋　岩石
ごまを煎る音を眼ざめた床で聞く　同
しづまつた頃に巡査はやつて來る　高松　松永　廉夫
晩春の寂しさ故郷思ひ出し　同
馬券買ふ女の肌の見えすぎて　兵庫縣　田邊　由布
地下鐵の匂ひの中の街の戀　同
物質は惠まれて居て京人形　大阪　馬淵　龍域
妾宅の猫は鼠に侮どられ　同
見送りの一群二日醉で居る　長野縣　高峰　柳兒
箸を手につけず返盃忙がしい　同
後からの豫感ほんとにして呉れず　愛媛縣　今川　椋影
恐いとは女甘へてゐるのなり　同
妻あてに書く殿の字はおどけてゐ　松江　田中都之介
伯母のへそくりが轉げた若夫婦　同
悪運が強いなどとは他人の眼　兵庫縣　酒井美知夫
としよりの手にのばされる札の皺　同

眼科醫の雜誌に倦いてなほりかけ　名古屋　稻垣　正穫
療養の友を羨やむ忙しさ　同
美しい名を持つてゐて捨子なり　石川縣　松本　文太
針箱の一錢銅貨も間に合はせ　同
金庫背にして支配人はげてゐる　名古屋　内田　元子
レモンティ詩人としての眼を持てり　同
風呂の桶利己主義のシヤボン入れられる　大阪　難波南海男
いゝ機嫌ストツプへ六人もつめて過ぎ　同
紅茶を二つ並べて嬉しい日　丸亀　馬場　浪二
晴れた朝曇る夕も妻とゐる　同
停年に近く盆栽など蒐め　大阪　松枝　靜波
駈けて來て通過電車に腹が立ち　同
トラックの砂利へ土工の寢て走り　東京　阿部佐保蘭
鈴蘭へどれ〳〵と云ふ父の鼻　同
氣をつけの顏から顏へ蠅が飛び　今治　綾田　三郎
借傘と知らず女給は名を覺え　同
ひとり居の僕のこゝろへ姉が住み　島根縣　森山さわだ

ついそこへ月が出て來た山の宿　同

爆撃機見に出る下駄の片ちんば　廣島　得能　紫溟

雨蛙危ふくふまれさうになり　同

糸切れて松の緑ははじめから　大阪　畑田よし江

算盤はまだ儲けてる手つきなり　同

行水へ夕立が面白い子が並び　石川縣　山崎帆加夫

兄弟三人咄さず食べて寢る日なり　同

もう醉がまわつてくどい父になり　東京　風間　花盈

みつ豆のくる間仲よしよくしやべり　同

臍操りもよかろどうせは俺のもの　島根縣　米原　木馬

フロックの墓參冥土で氣に入らず　同

拔擢をされて裏切者にされ　尼崎　山田南濃路

始末書へ五十錢出す指眉毛　今治　渡邊　芳岸

奥様のお世辭がもれる應接間　島根縣　伊藤　佛心

ペン止めて夢の母親追うて見る　大阪府　北山　雨成

小使に不自由のない母がくる　今治　青野悅太樓

燒酎に夏の味覺の舌ざはり　島根縣　勝部　海棠

これからの先を寢床で考へる　朝鮮　弘津　慶一

思案する時は枕に顎をおく　大阪　金丸　隼人

保險金來年貰ふととで死に　廣島　黑本　芳泉

戀をば秘めてうつむいてねる　今治　渡邊　曉童

街燈が二人へチョイト明るすぎ　大阪　上山よしみ

湯上りの女魅力を辨へる　布施　岡山　和夫

どうでもよい集りであくびをかみ殺し　愛媛縣　岡田　浮草

かしや札浮氣心が動きかけ　神戸　藤井　徒歩

朝露を踏んで脚氣の顏なじみ　兵庫縣　加茂　柳扇

取引に暇が出來ない花見時　大阪　泉　流葉

鉛筆の兄の忠告身にしみる　岡山縣　原美　靜流

人道の白靴逃げる撤水車　大阪　富本　無煙

營養のあるものばかり若い母　熊本縣　寺田　宗正

本代がチップと酒になつた夜　大阪　西端　南天

墓すこし左へ向いて暮れかゝり　同　正本　水客

取れるだけ取つて振つたが流行妓　愛媛縣　鷲野　榮

小言聞く涙へ浮ふ故郷の母　大阪　芝池　小波

捨てられた女給身重と知らざりき　奈良縣　嶋田翠峯

信用があつて借金増えてゆき　石川縣　山崎晴嵐

口笛で友に合圖をする若さ　大阪府　大島石艸

聲のする方へ振り向くかくれんぼ　廣島　野田昇玉

人妻と思はれぬ程はにかみ屋　高松　揚柳夢

頬突けば笑顔を見せる百日目　廣島　佐々木壽夫

○

宵明君の「農繁期」の寫實、「落選の」の鋭どい觀察、共に卓越した句である。久米雄君の「交番所」は殺風景な境地に一脈の情味を興へてゐる點、特に傑出した句だと云はねばなるまい。「酒が出るまでを」はそこらに轉がつてゐる材料だが表現で活かして平凡だと云はさぬところに妙味がある。斗風君の「陽の下の」は大阪といふものに深く喰ひ入つてゐるし、表現力も強い。「精力が」はユーモアの横溢、髭黨顔色なしの句である。菊人君のでは「爲らぬ姿」がいゝ。人間を眞ッ裸にしてゐる、私はこんな正直な句が好きだ。

同じ作者の「松竹の」の句は實感かは知らぬが、何處かに作爲の匂ひのするのが欲點だと云へる。文庫君の「古本屋」の句は古本屋を笑殺して餘りのある句だ。有爲郎君の「鍵をあづけられて」は人情の機微を巧みに摑んでゐる。「移轉して」もうれしい句境だ。明珠君の「入墨を」は或る種の人の惱みを描出した佳吟。作者が同情の眼をさびしく投げてゐることも見遁がせない。本號では大門君や三巴君の句には觸れなかつた。出來るだけ新顔の句について寸言を費したいと思ふが、誌面の都合でさうばかりもいかぬ。(路)

暑中御伺廣告を募る■□■

柳人に限つて特にお手輕な暑中御伺廣告をお取扱ひ致します。御後援の意味で大至急御申込下さい。

▼廣告掲載科　一口　金一圓

幾口でも申込んで下さい一口分原稿はなるべく簡單に願ひます

申込期限　七月十八日（嚴守）　（八月特輯號に掲載）

▼一頁御希望の方は特に御相談申上げます▼廣告申込は成るべく振替御利用の上前金でお願ひ致します。

（四錢以下の切手代用差支ありません）

川柳雜誌社

振替貯金口座七五〇五〇番

川柳人協會

振替貯金口座大阪三一五一四番

川柳名句評釋

(12)

麻生路郎

あるところにやあるなと寄附の話なり　東魚

二圓三圓の寄附でも、こちとらには痛いが、バサリと投げ出した一千萬圓の寄附、それで本體にゆるぎがないとはイヤあるとこにはあるものだ。

こんな川の水でも海へ行くのだぜ　紫痴郎

落つれば同じ谷川の水、ちよろ〳〵と流れゆく川水からも儚なき人生を悟れといふか。

保險屋のまだ〳〵喋る心算なり　港太郎

會社の資本金から、比率の他社より有利であること、掛金に對する利子がつくこと、息も切らずに喋べり拔く。大體こんな仕事は紹介がものを云ふのであるが、そうでないのは更に物凄い。

借りる氣へ膝をくづせのまあ飲めの　柳秀

「ああ、よく來てくれた。近ごろはひまでな。まあ、ゆつくりしてくれたらいゝぜ。君は飲ける口だつたネ」と斯うまくしたてられては云ひ出す隙がない。

のんでほし止めてもほしい酒をつぎ　葭乃

機嫌酒ではあるが、若しか健康を害してはと千々に心を碎くところ、流石に女房の女房たる所以。

泊り客よう寝ましたこ嘘を吐き

小太郎

可愛ゆくもない子どもの頭を撫でて見たり嘘をつかなくていゝ時でも嘘をつくのが人間の弱點だ。

いゝ人が來さうな夜だ三味を抱く

夢一文

「君をまつむし、夜毎にすだく」とひく三味の音も女ごころか。

重役の英語違つたまゝ通り

駄々坊

昭和の聖代になつても、矢張りテケツだの、ステンショだのと云ふ重役さんが相當にゐるらしいことには間違ひない。イギリスの何んとか大學を出やうが、アメリカの何んとかカレージを出やうが、斯うした重役さんに追ひ廻はされるんだから、間違の訂正なんか思ひもよらない。

奉公に行く娘の肩を持つてやり

今雨

なにも奉公に出さずとも外に方法がつかぬ事もなからうぢやないか。腹違ひといふものは水臭いもんだなあ。

冷やつこ女房へ缺けたまゝ殘り

三太郎

變哲もない家庭生活。これが人生かも知れない。

泉岳寺しばらく人は死にたがり

川路

泉岳寺へ參詣した當座は、やつたな、うまくやつたな。俺だつてやるよ。大石は偉い。今なら爆彈三勇士かと考へたがる。

抱擁を與へた金でめしにする

宣騷

被壓迫階級の悲しむべきこの行爲も、馴れるにしたがつて社會のただ事になつてしまつたのだ。かくしても人間は飯を要求する。

戀の罠あの眼だらうか眼だらうか

路郎

ひきずられゆく男ごころ。ああ、ああ。彼の女の眼が映畵のそれの如く、クローズアップされて來る。

異國に住めば

（天幸）

小倉圓平

疊、味噌汁、刺身、を忘れられない日本人は、殖民地では駄目だと、昔から、滿洲では云はれて來た、それが、そも〳〵の認識不足と云ふやつであつた。

どんな異國へ來ても疊、味噌汁まぐろの刺身が忘れられないので無理にでも喰ふと云ふ向ふ意氣强いところが、近頃云ふところの日本精神と云ふのであるらしい。

十年も昔は、素足で下駄履きで戸外へ出ることは國辱として禁じられてゐたものが、ちか頃は、滿洲人仲間にも、この下駄履素足が流行しだした。世の中が變れば變るものである。

今に滿人間に川柳が流行しだしたり、『褌にうちわさしたる亭主』があつたりするにちがない。

子供と共に在れば

石崎柳石

A

初夏。黄昏の椽側に出る。外の小路での、近所の子供の、獨特のアクセント交りの會話が聞える。女の子の聲で、

「Mちやん、あれフナぢやがネ」

「コヒだい」とは男の子。

「あれ、ゴハンツブを食べるけんフナぢやがい」

「いんにや、コヒぢやがい。見てみい、ゴハンツブ縱に喰べるけん」

「でも、フナぢあと母さんが云ふたワイ。コヒなら。あんな笑ふた顏して泳がんがイ」

「コヒぢやワイ。まつすぐ泳ぐぢあろ、よう見い」

「あれ、フナぢあがネ」

と二人の相讓らざる會話が續く。

私は獨り微笑をもらしながら黄昏の椽側で涼風を入れてゐたのである。女の子は一途にコヒを否定するし、それをコヒとして與へたらしい男の子は又一途にコヒと主張して、兩人果しなくフナ・コヒ論が續けるのである。

此の兩人が大人となつても、斯く相讓らずして「フナぢあがネ」「コヒぢあがい」とやるだらうか等獨り想ひながら……私は微笑して聞いて居たのである

B

夕べとなれば、子供を風呂に入れるのが、おやじの役目である。が子供は嫌やがる。父うさんの湯は熱いと云ふのである。一度熱かつたら、いつでもおやじの湯は熱いものと心得てゐる。これをすかして入れるのも仲々手が要る。妻になだめられて、ガーゼの手拭を下してもらつて飛んで來た男の子。

來るなり直ぐ「父うちん、これ三味線の繪だネ」と云ふ。見れば手拭に三味線の繪が藍色に染出されてゐる。

「本當の三味線を見たか」と尋ねると、見たと答へる。で、三味線はどう云ふ時に彈くものかと問ふと、これは難問だつたらしい小首をかしげてゐたが、

「あれネ、アノ、セメンガシの後について行くワイ」と答へた。

雨と風

福田山雨樓

六月九日。梅雨の最中にはや

り目を患ひ兎のやうな眞紅な眼をして多忙なシーズンを役所の机にかぢり附いてゐた。一寸席を外した間に僕を訪れてくれた人がゐる。見ると艸樂兄だ。だしぬけもだしぬけ同君は先月愛妻携帶で上京したばかりなので僕は自分の眼を疑ふほど吃驚したが、血が逆流するばかりにうれしかつた。早速應接室でむさぼるやうにして話した。一時間は十分間も經つてゐない位に思はれた。今度艸樂兄は愛孃をつれて全られたとのこと。あれもこれも話を聞けば懐かしいことばかり。

風の如く來て親友を喜ばせ　山雨樓

この句は名古屋の交驩句會席上で路郎先生の選に入つたのであるが僕が名乘ると次の句を披講される先生の聲が一寸涙ぐんで聞えた。今僕はこの句が夢からぬけ出して來たやうな氣がする。

幻影はめぐる

麻生葭乃

結婚生活に這入つて以來、私には私の本箱といふ物がなかつた。私の机といふ物を持たなかつた。手紙を書く時には、主人の机を半分拜借する事にしてゐたからだつた。

或る日、孔子園に下宿をしてゐる書生さんの部屋を、一寸覗いて見た。型の通り質素なテーブルクロースの上にマーブルの置時計が置かれてあつた。ペン皿もあつた。頸長の一輪挿もあつた。机が欲しいと思ひ出したら矢も楯もたまらなくつて來たので、機見女さんが使つて居た机をゆづつて貰つて、電燈の下へ据えた。ニスは剝げて居ても私の机である。學生時代は日曜は、終日讀書をしながら、口をよごすために、キャラメルだのチョコレートだの、甘納豆などを右の抽斗へいつぱいに蓄へ込んだものだつたが、今はそんな用意のよい事をしやうものなら間食好きの狼共が忽ち、襲來してお腹をこはして終うのにきまつてゐる。私の机の抽斗は部屋に散らばつてゐる物を投げ込むための抽斗ではない。屹度、鉛筆の削屑位、隅つこにたまつてゐるだらう。などと想像してはいけない。氣持の上にルーズなやうでも私は頑强な父蘆村の血を受けついでゐる。一寸私の抽斗を開けて御覽なさい。鉛筆は夜店のステッキのやうに、押ピン、ゼム、バンドの箱は大阪壽司のやうに積み重なつてゐる。これならば、大丈夫、目分量の下手な私でも停電の不意打に狼へずに、目的の物を取り出す事が出來るのである。

机の上にのせる花は、何がいゝだらう。可憐な河原撫子、清肅な水仙清楚なすゞかけ、どれも皆氣持を落ち付かせる花としては優れてゐる。牡丹や日車のやうな華麗な大輪の花はどうも書齋向きではない。今私の机の上には函館の晟偕さんから送つて頂いたすゞらんの花が馥郁としてかほつてゐる。私の魂はまだ見ぬ北海道の六月の野を、初夏の風に吹かれて逍遙してゐる私の同窓生には北海道の人が多かつた北海通から來てゐる寄宿生の一人が、ウヰンドウ・シルの上に大切さうに、たつた一輪の鈴蘭を飾つて「これね、リリ・オフ・ザ・バレーよ」と見せて呉れた。此は私の十二三才の頃だつた。「なんと、まあ香りの高い花だらう」と其純白な可憐な花が私の印象に殘つたのは凡そ三十年も昔の事だつた。クリスマスの夜はプレゼントの西洋人形を机の上へ座らせた事もあ

つた。

字引をひきながら、ついうと〳〵と眠氣がさして午前四時頃まで、机の上にうつ伏して眠つた事もあつた。机を腰掛にして讃美歌を唄つた事もあつた。

今、私の机の上には、群を抜いて贅澤に見える品は一つもないが、孔子園の書生さんの部屋にはあつた。機見女さんの机の上にもあつた。それは何だつたか、品物の名は憶えてゐないが他の持物と比較して、とても、つろくの取れぬ贅澤な品であつた。これは獨身者根性の趣味、書生氣質の道樂と私はいつてゐる。十圓ほどの間借の身分でありながら、彼等は高價な一本のネクタイで貴公子然となり、セツト三十圓からの果物皿によつて、はげたニスのテーブルは俄然紫檀の卓上と變り、破れた疊には、重々しい絨氈が敷かれるのである。しかし幻想は我等の生命である。机をめぐる過去の幻影によつて私は幸福である。綠の野にたはむる〻羊の如く私の心は安らかである。

異國に住めば

奉天　石原青龍刀

黄塵に春を感じて住み慣れる
生き甲斐は柳の絮の飛ぶ時節
朗らかな話の種に國訛
阿片の香甘きを解し救はれず
防腐劑ほのかに異國めかす醉

桃太郎序曲

石曾根民郎

（上）

されてゐる一口噺である。これに似た屁の話に、嫁があをい顔をしてゐるのをいぶかつて「お前どうしたのだえ」「おはづかしいのですが屁が出たくて」「なに遠慮することはない」と許されたので、ではご免とばかりお見舞申すと、その一發が大きいため、姑が天井に吹き上げられた。姑は驚いて助けてくれといふと、スツと鳴り下げてやつとおちついた。幼かつた頃よく話された屁話である。

× × ×

山へ草刈りにゆくおぢいさんと川へ洗濯にゆくおばあさんとの夫婦の道、桃太郎が健やかに成長して孝養を盡す父子の道、桃太郎主從が終始一貫なこやかに振舞ふ君臣の道。

× × ×

桃太郎地震のゆるをぢきに知り　（古句）

一九一〇年版の Tales of old Japan の一項に The Adventures of Little peachling があるが、„Ken! Ken! where are you off to, Master Peachling?" の Ken! Ken! Ken! の註に The country folk in Japan pretend that the Pheasant's call is a sign of an approaching earthquake. とある。

× × ×

桃を食べようと思つたら、中川へ洗濯に行つたおばあさんがプツと屁をしながらいふことに「おぢいさんもさぞ山で草刈らう（臭からう）」松本地方で口承

から桃太郎が生れた。おばあさんが桃を食べて若返つて桃太郎が生んだ。後者は古版にあるらしい。古來、桃は厄鬼を拂ふことについて種々傳承されてゐるけれど、末摘花初編の冒頭句の句解兩説の一説を思惟されるほど、色彩こまやかなる鄕土玩具に四國高松の「鬼々島のやげ」がある。

× × ×

里の犬、野の雉子、山の猿。犬は仁、雉子は勇、猿は智。犬猿の仲を融和させる桃太郎の氣慨もさることながら、芭蕉の句の 申さ戌仲をとりもつ酉の年 の雉子も、與つて力あつたことを見のがすべきでないと、岡部物外の『昔ばなし桃太郎の新釋』のなかでいつてゐる。

物眞似で號令をする桃太郎　蝶二

桃太郎三疋の語を使ひわけ　新兒

× × ×

柔團子を所望すると「あげませう〳〵、ついて來るならあげませう」と桃太郎がいつたように幼稚園で唱はせてゐるが、桃太郎の雅量を冒瀆するものでけしからんと巖谷小波げ憤慨しておられる。後藤新平伯も指摘されたらしいが、そんな交換條件を桃太郎は差し出したのではないといふ。

雉猿も團子一つでつり出され　歩人

つり出されたナンテなどと小波翁は怒るに違ひない。

× × ×

愛嬌があつてお世辭がわざとらしからず長唄が上手で三味の手さばきもよく、その上に顏も綺麗で眸は人をうつとりさせる輝きをもち、花柳の踊はたしか常盤津清元の心得もある。藝妓さんのお亭主、お内儀も是非抱へたい。話がまとまつて二月の朔日からその名も桃太郎と名付けた。「桃太郎はだん〳〵大きくなりました。十五、十六、十七となつて其樣子の佳さと申したら」楊貴妃の生れ變りかと思はせるほどで「蕪よい初花手折たい」連中がワンサとつめかけるのだが柳の風となびかうとしない。桃太郎は遂に一本となり年期五年も過ぎてお禮奉公の半年看板も借りてゐたが、蟲眉の客が許さず、親方の家が日本家といつてゐたので、その分看板で日本一と出し、稼業に勵むことになる。二十の暮には七、八千圓も預金がある豪勢。或夜、東京の吳服屋さんの大懇親會で「亂痴氣騷ぎの中に、未だ至つて若い、物の靜かな、羽左衛門式の男」に桃太郎は初戀をおぼえる。今までやさしかつた桃太郎が何かとあたるようになつたのも、戀のなやみからであるらしい。「薄々知つてゐる日本橋は檜物町と聞いた吳服屋の鬼印の店を通ると、店の帳場の中に

麻生路郎編著・柴舟漫畫
累卵の遊び
四六版一六〇頁・函入・漫畫三十二葉
定價壹圓
特價八拾錢
送費九錢
川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噛んで碎いて摂り餌にしたのが「累卵の遊び」であるとは著者の序文の一節である
大阪市西成區玉出本通三ノ三六
發行所　不朽洞
振替大阪三〇三九二

算用してゐる」かの人をさがすまなざしを吳れる。うつら〳〵したやるせない戀ごゝろ、何とかして晴らしたいものだと思つてゐる。思はず日本家のお内儀から「若旦那は五六日前から鬼ケ島の別莊の方へ行つて居なさるさうだよ」と聞かされ「鬼ケ島つて何處です」「お前が桃太郎だから、向島の洒落なのさ」といふわけで、若旦那は下戸だからと藏前の團子を持つて雷門前へ來ると犬丸といふ太皷持が「桃太郎さん何處へお出でになります」「向島へ浮氣に行きます」「一つ下さいお供申さう」今戸の渡へ來ると顏を赤くして醉つて來た藝者ばらがきの猿次渡船が竹屋へ着く土堤の中でケンの上手な野太皷の雉子八を、それ〳〵團子の挨拶よろしくあつて供とする。犬丸、猿次、雉子八が若旦那の機嫌を取持つて首尾よく桃太郎が鬼印の「若旦那を家へ連れて來て長火鉢の向ふへ、それからといふもの、粹な事ばかりで春を迎へける。めでたし〳〵」『藝者五大噺』

異國に住めば

和田默然人

二十年の天津生活

包裝を解けば櫻の花盛り
筍に芽に故國をなつかしみ
日本化してゆく此處のネオン街
素破といふ時に一滴祖國の地
ゆるぎなき國礎の上に宮居立ち

天津神社

北陸より

安川久留美

天氣がよくなると汽車に乘りたくなるのも一つの病氣ではあるまいか、出てから三十四年も經つ故郷の海を見てホームシックになつたり、松原つゞき砂をふみつゝ亡きWをしのぶなど柄にもない不惑を過ぎた男のいふことでせうか。何ごとにも感謝してゐます。

この頃十七八の小娘のやうに戶外ばかり眼につきます。

ひる顏と月見草咲く小舞子に
朝露ふみて旭おろがむ
野茨の香りたゞやう川べりや
美川の橋の長くもあるか

話

石田沐天

神經にさはる話を笑てする（正本水客）、我慢して世間話に聞いておく（妹尾變人）、人の世の姿の一面を現はし得て妙味の句、詞の花に粹ふてゐる人間は幸ひである。刺の詞に半句の眞理が無きにしもあらず。水客氏の句は或ひは老獪者の樣にもとれるが此所では左樣はとらず、癪に障る話も笑つてするやうになれば人間一人前に相違ない。ひところ此の社會でモードしてゐた默殺とか稱して澄し込む人間さえあるのだから。

すべて主張とか弊害とかを除かうとして起つ者は厭はれるもので、古今これがために生命さえ縮めた人間が澤山ある。

今回藤村亜鈍氏が突如一文を草され相當「柳界の姿」をキヤツチしてをられる中に「柳壇のコスモポリタニズムが路郎師の音頭だからと云つて白眼視するとは何たる事だ社會の機微を穿つ川柳家にしては餘りに解らな

さすぎる話だ」と喝破されてもグウーの音も出ないことでは吳越同舟詩道に歩く者共として餘りにも淋しい氣がするではないか、筆者もまた路郎師のために辯じなければならぬ情理はないが川協の一員としてこの筆を執つたまでゞある。

一月の大阪朝日の講堂に於ける「川柳雜誌」の例會に東京の村田周魚師と麻生路郎師の會見と成り、周魚師は認識不足であつた點を詫び川柳人協會に對し絶讃を吝まなかつたのである。路郎師また相讓つて此れに感謝し東西兩雄が互讓の感激的場面に筆者などは眼頭が熱くなつて頭を上げ得なかつたものであるこの麗はしき冬の一夜は川柳界近來の快事であつて今更に川柳子周魚師のその人たるを識つた者の一人である。幸ひ筆者もまた川柳子の末端に在り多言を要すゝ好まぬもの、川柳の同志よ神經に障る話であらうが、いつまでも川柳界の世間話として聞き流せますまい。

牡丹

宮內白峯

當麻寺の牡丹觀賞にでかけたが花は一輪も見せて吳れなかつた。人間なればいろ〳〵と扮裝して見せて吳れる。出戻り五六回位は處女ぜんとしてさ。でも滿開の牡丹より嬉しい氣分に浸つて來た。大師さんを喰つてる人が病氣をなほしてやると五丁程ついて來たのです。親切なのは人の世の中です。

ある日の一斷面

麻生路郎

雨の降る日に、住吉大社の前で、燕のやうに身をひるがへした斷髮洋裝の乙女が、合掌祈願の姿態を見せた。

外形こそ、新らしいが、その心のもち方は矢張り昔の女と少しも變らない。職業はダンサーらしい。身は深紅の衣に包まれてゐるが、彼氏の事を念じてゐるやうな浮いたさまも見へないむしろ生活戰線の鬪士として、「我等に今日の糧を與へたまへ」と祈つてゐるとしかうけとれなかつた。

×

私等が西陽をまともにうけて校正してゐると二人の保險勸誘員が這入つて來た。簿記机に凭つてゐる印刷所主をつかまへてボチ〳〵根氣よく誘ひ落しにかかつたが、どつこい今まで默つて聞いてゐた所主が樋の口を切つたやうに喋べりはじめた。

約二時間、ひくにひかれぬ破目で謹聽させてゐた勸誘員がとぼ〳〵と歸へつて行つた。喋べることに於て、上には上のあることを知つたかも知れない。生きるべくあまりに氣の毒な風景だつた。西日をうけた校正も樂ではないが、勸誘といふ仕事も樂ではないなアと思つた。

屏風
襖
表裝
一式

表裝は思ひたつた時に！

山守表具店

大阪市住吉區阿部野筋三
電話戎五四六〇番(呼)

御一報下されば直にお伺ひ致します

町・横・柳・川

☆

裏日本と云ふ言葉には親しみよりも哀愁を感じる。北陸と云ふ言葉には強さを感じる。

☆

すべての物が落ちる力を失ふまでは防空は不可能だ。

☆

「きやり」の紙質が落ちたと「快速度」で非難してゐたが非難するより金一封の方がきめがあらう。

☆

道を歩いてゐたら、勢ひよく一枚のカードを呉れた男がある。それに、失禮ですがあなたの寫眞を撮らしていたゞきました。御注文は……と書いてある。人の懐に手を差し込んで、もう墓口を握ってるやうな商賣振りだ。それに比べると路郎の職業川柳人は喧嘩越しに見へる。下手糞だな。

日本名所

柳川物名

（京都の巻）

山川紫明選

朝賀大鱗畫

（十二）加茂川

幹彦のモデル加茂川懐かしみ　案山子

加茂川の流れ四條は宵の口　いの助

加茂川の邊へ番頭案内し　香方

自轉車で加茂川渡る悉皆屋　葉光

赤ぐろい水に馴れてる鴨河原　桑岳

加茂川へ浮して見たい屋形舟　胡枝花

☆

母蟹が子蟹のしつけに、そう横に匐つては駄目よ。斯ういふように匐ひなさいと矢張り横に匐つたといふ話があるが、いかに母蟹のやうな川柳家の多い事よ。

☆

電車の中には生活がない。汽車の中には生活がある。（不死鳥）

青空の下の句會

六月十三日　葭乃記

豫定の發車時刻に、間があるので、艸樂氏と阿部野橋驛構内の植物苗實場を參觀に行く。濱木綿の御教示にあづかり、元の待合所へ歸つて來ると、こは如何に新水氏と路郎の姿が見えぬ。さあ大變、油を取つてゐる間にスローモーション幹事おいとけぼりにされたかと、心配してゐたら、新水氏胸高々と汽車辨を積み重れて現はれた。このところスローモーション幹事二名は先を越された形である。「人はパンのみにて生くるものにあらず」の効き目がきゝすぎて

ロケーション加茂の河原を逃げ廻り　雨城
加茂川へ嬉しさ包んで來た二人　陽出男
木屋町の朝加茂川に呑み直し　其奥
加茂川へ二人繪に成る姿なり　浪二
加茂川の風を袂にして笑ひ　木履
梯子酒又加茂川へ出て終ひ　牡丹
加茂川でもう友禪はかわき切り　同
加茂川に犬洗ふ人見てゐたり　水客
加茂川の幅に四條の橋の風　同
京極を出て加茂川で吹かれてゐ　翠峯
加茂川のほとりで戀を打明ける　同
思つたより加茂川を汚ながり　佐保蘭
加茂川の灯をほめてゐる生ビール　同
加茂川と並んで小さい流れを見　同

佳句

加茂川の石で友禪押えられ　同
三味の音加茂川べりは雪の景　案山子
假橋のまゝに加茂川さびが付き　石悟樓

うつかり忘れてゐた。「提げるのに風呂敷がないなア」と誰かが云ひ出した。「此邊に知りあひはあるが、風呂敷を借るほどこゝろやすくないのでなア」と艸樂氏の聲、悠々迫らぬ艸樂氏の落ち付きに感心してゐる葭乃、それを傍觀してゐる路郎、かうした雰圍氣の中へ、いつの間に何處で取つて來たのか、新水氏の手から宣傳用の新聞が數枚出る。八歩氏の手から今買つて來たらしい唐草模樣の風呂敷が投げ出される。もう〳〵馴れぬ者が幹事をすると恥のかきづめだ。いざ出發となつた。艸樂氏に告知板へ書き殘して貰ふ。血のめぐりが漸く此所まで働いた。

○

田邊下車、道を臨南寺にとつて、初夏の空氣を滿喫しながら、歩るく、草の香り、池の水の匂ひ漫歩する一行を包む。臨南寺の門をくゞつて後を振り返ると、和服姿の綠雨氏がニコニコして歩いて來た。稍々出蟹目の時間で來た我々一行に告知板も見ず家から一直線に歩いて來たといふのに、ちやんと物差しで計つたやうに此所で會ふとはとても不思議、川柳雜誌創刊當時から取締役だけあつて、永年の功績はこんなところへまで光つて出る。本堂の前、龍舌蘭の傍で記念寫眞を撮る。技師は新水氏。

○

當寺の裏手小高い丘の上で辨當を開く。盃を傾けながら、畑から來る蠅を追ひながら、新水氏の宿屋交渉の秘訣を聞く。樹影の風は涼しく、雲の峯は、やがて七月となる空を示してゐる。幹事養成戸外講演會は聽講生寢そべつたまゝの莚の上で閉會となつた。

第三回 青空の下の句會

—七月十一日第二日曜—

午前十時迄に住吉神社反橋の前へ集合。今度は住の江公園方面です。雨天中止。小雨決行。兼題「反橋」世話人(新水、葭乃)

松本文太著

川柳句集

霧の聲

麻生路郎先生序
安川久留美先生序

軍配叢書第一編
四六版天金 約百七〇頁
箱入美本布表紙
定價 壹圓

自句約八百句に—上海事變從軍日誌からの拔粹文を配した人間文太の清算書である

發行所
石川縣羽咋郡羽咋町
半島柳川社

申込所
石川縣羽咋町
松本文太

清酒
白鶴
ハクツル
發賣元
嘉納合名會社
大阪・東京・神戸・京城・仁川・大連・奉天

★柳人素描

（一）前田五健君

前田五健君は圓轉滑脱、よく宣傳の妙味を把握するので、伊豫電鐵の社寶であり、松山の名物男である。刀劍、繪畫、武道演藝を嗜しなみ、行くとして可ならざるなき多藝多能の士である。舞踊をよくすると共に又居合術の如きは五段の有段者で其得意とするところ、松山本部の副師範である。所謂文武兩道の達人でちよん髷時代なら五百石位はブラ下つてゐると云つても過褒ではない。川柳を作りはじめたのは大正四五年の頃か

金言の通りにやると蹴落され
名所圖繪こゝらは雲でぼかしとき
花鋏思慮斷行の音を立て

が君の句風である。

本名は自ら野暮臭いといふ久太郎（ひさたろ）、別號は欣瞳居、瞳歩。出生地

川・協の仕事はエスカレーターのやうに撓みなく前進を續けて居るので御安心の上、氣長がに御支援願ひたい。大分基礎工事がすすんで來たのも柳界の將來を深思されてゐる諸君の御後援の賜だと感激してゐる。　川柳人協會

▲青森、函館の柳人交歡の意味から亀井晟修、小林不浪人兩君の斡旋で年中行事となつてゐた海峽親善川柳大會が今夏から廢止される事となつた。

▲六月十五日久良伎全集完成祝賀會が日比谷の美松で開催された。森律子、本山桂川、高須芝山畵伯、峰間商大教授外川柳家二十五名出席、名自所感を述べ盛會であつたとのこと。續いて久良伎氏句碑建立の議もあつたと。

▲「柳人素描」は川・協名譽會員に限らず理事、評議員、正會員に至るまで全部掲載の豫定である。自他の事に限らず、よき材料をお持合はせの方は內報を乞ふ。

▲遠隔の地にあつて、親しみを早めるために會員の寫眞を掲げたいので近影の惠送を乞ふ。

▲庄萬よし君は過ぐる六月一日擧行の大阪市會議員選擧に際し三度立候補して三度當選し川柳人のために氣を吐いた。

▲岸本水府君は六月五日附で、森雞牛子君は六月廿日附で川・協名譽會員を辭退された。

▲遠近各地の會員で來阪された時には是非共寸閑を割いて本會（電話天下茶屋二五七九番）を訪問されたい。協會に對する認識を深めるためにも特にお勸めする。

▲川・協入會申込書のついた入會案內が出來たので御希望の方は申越されたい。

申込所　大阪市西成區玉出本通三の三六　川柳人協會

は高松。名譽職は枚擧に遑がないが、川柳關係では川柳雜誌社及びみすか吟社の客員、川柳人協會名譽會員。著書としては「川柳一糸集」がある。

(二) 安川久留美君

金澤の名物男、安川久留美君の半生は酒の歴史だ。君の才能を發揮させたのも酒だが、君の職業を三振させたのも酒だつた。酒が命の、その酒をヒタリと癖めて、甘黨に轉向したことは犀川が逆流しはじめた感がある近ごろひまさへあれば汽車に乘る。汽車は君のよき話相手だ。

君は新しい意味の頁寛たらんとしてゐるのではなからうか。君が川柳に手を染めたのは明治四十一年五月頃だと聞く。

善人の眼が掬摸の眼をごまつかせ
工事場の春を戸板が擔がれる

と云つた句境に、久留美ファンをよろこばせてゐる。

本名は實(まこと)、別號は寞戯。出生地は石川縣河北郡高松町。職は北國夕刊新聞社に奉じてゐる。川柳雜誌社客員。川柳人協會名譽會員。著書としては句集「かき松葉」「小品文集」「北國俚謠」等。

行路集

（完）

長野晴濱

白樂天

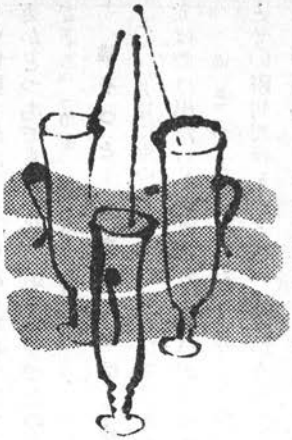
腰を低れまた手を歛めしかじかと白樂天も歌ひけらずや
入ればすぐ出でて行くといふサラリイを白樂天も歎きけらずや
書を讀みてまなこ暗しとうめきたる白樂天を思ふ秋の灯

仲よく

しかすがに說教びとはぴたぴたとおん額など叩きたまはざり
いざ仲よく資本の陣を固めようよ君の說教われのそろばん

思ひたえ

すらすらと出でくる歌も窮りぬいざ思ひたえ事務に向はむ
淋しさや歌の思ひのむすぼほれ成らでぬる夜の數もそひつゝ
夜ふかしはあすの勤にさはりありやめんよ歌は淋しかれども



うちの猫を中心に

川柳指導講座「猫」

塚越正光

私が大阪に居た時分、近所の看板屋から三毛の仔猫を貰つた。茶目と名づけて可愛がつて居たが、行儀がよくつてお膳の周圍なぞは決してうろつかなかつたし、ふんしもよかつた。殊に私の咳拂ひの聲を知つて居てどんなによく眠つて居てもエヘンとやるとひよいと眼をさまして私の顏を見てニヤアーと一聲鳴いて傍へちよこ〳〵と來るのが例だつた。家内の話では私が句會へ廻つて夜歸らない時など隣家の主人が咳拂ひをするとひよと首を擡げてくるりと見廻して、私の姿が見當らないのでつまらなさそうにごろんと寢轉がつて仕舞ふといふことだつた。

この猫が夏が訪れて表を開け放つ頃には稍青春期に近づいたので、猫取りが危ないなと思つて居たが、ある日晩飯の時食卓のまはりをうろつかない。茶目が表へ出たのを見ながら箸をとつた。お茶を呑み初めても歸つて來ないから「茶目、茶目」と呼んでみる。いつもなら返事をしながら飛込んで來るのが何の應答もないので家内が慌てて外へ飛び出して近所一帶に呼んで歩いたがたう〳〵姿を現はさない。見事に猫取にやられたのである。それから當分は餞湯へ行く道の小川のふちを通る時は、皮を剝がれた茶目が投げ込まれてゐるのが辛さに小川の方を見ないで往復した。私も家内も夜中に近所の赤ン坊の泣き聲に目覺めて庭へ面した硝子戸をあけてチョッ〳〵と呼んだことも幾度かあつた。

それから虎毛、黑、三毛と三匹貰つたがみんな二月位で消えるやうに居なくなつて仕舞ふので、私は猫取に狙はれて居るものとして以來ふつつりと猫を飼ふことをやめてしまつたが、去年の六月茲の家へ引越すと間もなく近所の八百屋が軀は眞白で耳から額へかけて尾に赤い斑のある金眼、銀眼の尾が胴の長さ位ある仔猫を連れて來た。

これも茶目と名をつけて可愛がつたが、折から夏でもあるし猫取を極度に恐れたが、いゝ按配にその難を免れて立流な牡猫になつてゐる。この猫の自慢をさせて貰ふと可成お話があるがそれは何れかの機會に讓つて、知つてる人になら塀の上に日向ぼつこして乍ら聲をかけること、近所二三町なら家内のあとをのこ〳〵蹤いて歩くこと、湯氣の立つてゐる熱い御飯を嬉んで食べること、生魚を絶對食べないこと等よその猫とは變つた點を持つてゐる。家内のいふのには主人が一風變つてゐるから、猫まで變つてゐるのでせうといふのだが、これは何うかと思ふ。ところが先月末出入の洗濯屋が眞つ白な牝の仔猫を持つて來て呉れたが、これは銀眼でチビと名づけたがこいつも何うやら一風變つた猫になり相な片鱗を示してゐる。

私は猫といふ課題なので猫の習性をいろ〳〵いふつもりで書き出したのだが、うちの猫で大分貴重な誌面を費して仕舞つて、まことに申譯のないことをしてしまつたが兎に角猫といふものは可愛いものできやりの社人獨樂平君などは愛猫に死なれたことを悲しみのあまり生きた猫は死ぬからといふので猫の玩具を蒐め出したが、玩具でさへあんなに可愛がるのだから、生きてる猫なら嘸と思つてゐる。この獨樂平君が猫の蚤を取るのが名人であるといふ話もあるがこれは後日談にして置かう。

さて今度は諸君の猫だが諸君は何んな猫を描いて居るか私はとても樂みにしてゐる。

見解の相違と猫ののどを撫で

とつてつけたやうな猫だが、これは家庭爭議の一場面として解釋すればさうでもなくなる、敢て逆らはぬのは夫か妻かどつちでもいゝ猫を道具に使つたのがこの作家の技巧である。（句主　大阪市　凡徹君）

猫そつと×をぬけ出たはしり元

（×は月扁に夾の字）は膝の間違ひではあるまいか、はしり元はぬけ出たへかけ調になる嫌ひがあるから

猫そつと膝から下りて台所

とその辭句だけをととのへて置かう（句主　大阪府　紫香君）

猫の聲まねても鼠まだかぢり

斯ういふ場合古川柳は「猫の聲色で追つてる不性者」と叙してゐる、だからといふのではないが、鼠と詠みこまなくとも鼠が浮かび出すのだから注意すべきである。この場合眞似ることにこの作家としては發見があるので

猫の聲眞似ても騷ぐ天井裏

としてもよいが古川柳の不性者には及ばない（句主　大阪市　七五三三君）

座蒲團に座つても猫は飾られず

猫といふ奴はよいもの好きで、客が來てよい座蒲團を出すと挨拶してゐる間にそれを占領して仕舞ふものだが、この飾られずは何を意味してゐるのであらう、大阪にも生きてゐる猫が飾窓の中で座蒲團を敷いて寢てゐるのが評判の店があつたと思ふが、だから

飾窓猫は眠つてばかり居る

とでもして街の一點景にしたらどんなものかしら（句主 大阪市 隼人君）

叱られた猫は娘の膝へ逃げ

木綿より絹、銘仙より錦紗を好む猫だから逃げるにしても娘の膝を選るかも知れない。

私の宅では生憎娘が居ないものだから、叱らない私の膝へ逃げて來る（句主 大阪市 龍城君）

猫にのみ異狀があつて無事な家

この異狀は作家の獨合點で、相手にはさつぱり判らない從つて下五の無事な家が生きないことになる。

隱居所は猫のお產にざわめいて

と平穩な家がちよつとざわめくそれを叙してみることも手法の一つである（句主 大阪市 香林坊君）

空氣銃雀狙はず猫狙ひ

空氣銃で猫を狙つたことだけで雀を狙はないことはつきりしてゐるのだから。

空氣銃猫を狙つて叱られる

とした方がまだしもだが、これでは幼稚のそしりは免れない。ただ叙法を示しただけである（句主 大阪府 石艸君）

野良猫の死したるもとは猫いらず

私達の先輩の句に「猫いらず食つた鼠を猫に見せ」といふのがあるが、これは野良猫が猫いらずで死んだらしいが饑えてる野良猫だからそんな想像も出來ないこともないが猫いらずで死ぬ猫は滅多にない、といふのは嗅覺の發達した彼女であるから、うちの猫などは、ぷんと來てゐる飯は絶體に食べない。

野良猫のみいらのやうに死んでゐる

と乾からびきつけた形狀を詠んだ方が無難である（句主 高松市 柳夢君）

特選の猫見直され〳〵

藤田嗣治描くところの猫の圖、嘆賞の聲ではなく、何處が特選の價値かと見直したのであらうか、穿ち得てゐると言つたら考へ過ぎかも知れないが、本欄の作家として出來過ぎてゐると言へる（句主 大阪市 春巣君）

長火鉢赤い鳥居に招き猫

これでは藝妓屋が出先のお帳場にあるものをただ羅列したに過ぎない、そこで

招き猫置き場を變へて打つ切り火

と女將のあせり氣味な氣持を叙して見たらその雰圍氣が髣髴として來る。だがそこ迄求めるのは無理かも知れない。（句主 愛媛縣 孝輔君）

兄だけは違ふ名前で猫を呼び

私のところでは惡戯つ子らしいから茶目とつけ、山本權兵衛伯に似てゐるからゴンとつけ眞黑だからクマとつけ、ちいさいからチビとつけてゐるが、白いからシロとはつけ

るものではない。何故なら彼女が汚れたとき灰色になつて義理にもシロとは呼びにくい、この兄さんも何かを聯想した名で呼んで居たのかも知れない。ただ惜しむらくはこの兄に必然性がないことである。つまり姉でも父でも母でも誰でもよさ相である。好意を持てば兄だから皮肉にもとれるが（句主　大阪市　煙雪君）

猫じつと日光浴の膝にゐる

あまり可愛がつて日向へ出さなかつたり、魚の骨を食べさせないと、石灰分が不足して腰の据はらない病氣になる猫が日向ぼつこを好み、子供が戸外の遊戯を好むのは、生理的欲求なのである、その點でこの作家はよい見つけどころをしてゐる（句主　名古屋市　三津君）

猫の背を立たせて犬は通りぬけ

背中を立てるのは敵への身構えだが、私のとこの茶目はそんなとき平素はすんなりした尾を二倍位の太さにして、ぴんと伸ばしてゐる中には犬を追つかける氣の強いのも居る。猫の方で逃げない限り犬の方は大概通り過ぎて仕舞ふこの句その意味で

猫の背立たせて犬は通り過ぎ

と辭句だけをととのへて置かう。（句主　朝鮮　惡源太君）

追ひつめた鼠へ隣の猫を借り

こんな時いつかニュース劇場で見た漫畫のように鼠を怖がる猫だつたらと思ひ出した私は天邪鬼かも知れない。又してもうちの猫だが、私の家には鼠が出ないものだから近所の鼠を捕つて歩くうちの茶目は近所でも評判がいゝ、隣家でも時々借りに來る鼠を追ひつめたことはないが、今にこんな場合も出來るかと思ふ。そこで

追ひつめた鼠隣の猫を借り

とへの字を省略して句調をととのへたがある人達からへがあつたつていいぢやないかと抗議が出るかも知れない。然し私は十七字であることを基調としたい（句主　長野縣　幹君）

猫を抱き乍らお冷を持つて來る

餘りものは猫にやれなんて諺があるが、猫好きは決して猫には餘りものをやらない。魚だつて猫の分は別に買ふ。茶六君のお母さんなどは自分は骨や頭を食べても猫にはいい肉を食べさせるといふからお冷なんか持つて來ても受付けないと思ふ。だが普通には猫舌といふ位だから冷飯を持つて來るのは好意なのであろう（句主　松江市　都之介君）

山莊の眞畫ぼんやり猫の夢

特選にはなるまいが猫を描ける一幅の畫として入選させるが、山莊がちよつと大袈裟すぎてこけおどかしの感がある。こういふこけおどかしの好きな選者もあるから、さういふ場合には思はぬ拾ひものをするかも知れない。（句主　岡山縣　美靜流君）

集句を繰返して見ると猫を各方面から觀察してゐることに氣づくが、私を驚かすやうな觀方はなかつた。たとへば猫の特異性とか、細かい描寫とか猫の毛、猫の眼、猫の耳猫の足等々々要するに平面ばかりで立體的なものがなかつた。諸君は課題に對してもつと廣く見つめなければよい作品は得られないことに氣づかれなくてはいけない。

武玉川三編研究（七）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(110)

苦いきせるをほふる鹿聞

東 魚＝夜一夜、煙をパク〳〵やり乍ら、鹿を聞かうと待構へてゐたが、中々鳴きよる鹿がない。煙草も苦い様になつたので、倦きはて丶煙管を投げやると云ふのであらう

秋の屋＝風流は苦いものだ。「道中膝栗毛」にも、鹿聞の失敗談がある。

省二＝この風流人煙草好きだから、苦い目をみねばならぬ。私のやうな喫煙經驗を更にもたぬ菓子好きであつたなら、甘い目をみるかもしれぬ。呵々。「鹿聞の淋しい足をうち違」（武●二）

(111)

鶯が能ければ籠に欲か出來

東 魚＝大變鶯が良い鳥なので、こんな籠に入れては置けぬと、籠も奮發するやうになるのも人情である。

秋の屋＝馬子にも衣裳といふ諺もあるが、況や百金の價ある鶯に於てをやだ。

省二＝鶯籠には實に善美を盡した贅澤なものもある。樂しみはそこ迄ゆかぬと滿足も出來ず、經驗にもならぬ。現今、鶯籠作りの名人は大阪にありと聞くが如何。

(112)

また捨切らぬ神へ言傳

東 魚＝病人の平癒を祈るやうな場合か。或は、この神は廓へ取まきで、入込むだ連中をさすのか。遊女が嘗ての「神」として連立つてきた者を、格子先に見掛けて、とだえてゐる馴染客へ、再遊を誘ふ言傳でもするのか。

秋の屋＝前説のとほり「神」は幇間の一種であつて、足

の遠くなつた客へ、遊女が言傳を賴むのである。

省　二＝私も東魚さんの如く二說を考へてゐた。髮結の長七から、カミ（髮）（神）の言葉が出たといふ。末社の事

(113)　**鵜遣ひの流につれて身のひねり**

省　二＝川の流れに從ひ、巧みに躰のこなしをして、鵜を操縱する。

東　魚＝私がみた鵜匠は、船にがつちり立ちはだかつて手だけで鵜繩を巧みに操つてゐた。身をひねッたりなどしない。寧ろ作りつけのやうにじつと立てゐた。――此句は恐らく、机上の作ではないか。或は船でなしに、自分がある深さの處まで水に入つて、鵜をつかふのかもしれぬ。

秋の屋＝此句の作者は、網打の姿勢を一見して、鵜匠を想像したものと思はれる。

(114)　**鰒といふ奴か出てより面白き**

省　二＝惡物喰は御當人にとつて、頗る興味ある陶醉性のもの、一命棄てる者もあるのだから、面白いにちがひはない。だが「世は餅にそろ〳〵鰒の派か利かす」（武●十六）の句もある。

東　魚＝鰒は下ノ關などでは、夏も喰はせるらしいが、一般には冬のもので、春になつては駄目なのであらう。だから「世は餅に……」の句もあるわけ。「鰒と云ふ奴が」と云つた處に、鰒好きの氣分がよく出てゐる。

秋の屋＝「面白き」は時候を云ふのでは無く、看として鰒が持出されたから、酒宴が面白くなる、といふ意であらう

省　二＝「雪の日にてふ〳〵の出る怖い事」で、此テフは彼岸頃に尤もよく發育するので、菜の花が咲けば、鰒は食へぬなどと云ふ。木下翁によると河豚は、善食類の一項とされてある。

(115)　**幡に隱るゝ衣屋の嫁**

省　二＝眞俗佛事編をよむと、旛の功德を知る。「旛ヲ作レバ離八苦……風ノ旛ヲ吹ク其福無量ナリ」と。衣屋の若嫁御が金襴の旛に隱れるのは、風情もある。

東　魚＝この句も面白い。佛事に用ふる旛に、うら若い娘を配した奇拔な對照が面白い。淺草門跡前などには、衣屋が澤山あつたと覺えてゐる。

秋の屋＝衣屋の店頭の情景であるが、金襴の幡の蔭に看え隱れする花嫁の姿は、繪畫的で美くしい。

(116)　**篠懸を這ふほんほちの虫**

省　二＝旅の衣は篠懸ので、山伏が澤山の雨露を凌ぐため、衣の上にきる麻製のものだ。米を長く貯へて置くと變色し、俗に言ふヒネ米となつて虫がつく。そのボンボチの虫が篠懸を這ふので、以て山伏修業の一端の窺へる。

東　魚＝前解につきる。面白い見付けどころ。

秋の屋＝ほんほち米を布施に貰ふは、山野に露宿する修

驗者らしい。それに虫を這はせたのは、凡手でない。

(117) **物思ひ蝕の盥へ寄つかす**

省二＝日蝕は盥に水を湛へて、寫しみるものであるが物思ひ（娘であつてよい）は、そんな事に興を覺えず、外の者が騒いで居るのに、獨り寄りつきもせぬ。

東魚＝物うさもあり、物思ふ身に、蝕などの不氣味さもあるのであらう。

秋の屋＝日月の蝕のやうに、胸のうちも暗いのである。

(118) **面打の振向方にかゝみ立**

省二＝鏡立は木の框造りの鏡架で、この句では所謂鏡臺である。面打ちが側に備へて置いて、顏をうつしみるのならむ。

東魚＝鏡立に鏡をのせずに、手本にする繪姿とか、面とかゝ上せてあるのではないか。（鏡立は恰も油畫師の畫架のやうに出來てゐるのであるから。）

秋の屋＝面打が鏡に自己の顏を寫して、面の形を附けると云ふのではない歟。手本にする繪姿ならば、特に鏡立を使用する必要は無からう。

(119) **娘の意地を立る負公事**

省二＝初篇の「負公事の方へ嫁は行たがり」と同工。「意地をたてる」と、あからさまに强く表現したのは、多少說明的に流れても居る。意地となると意外の成行きにもなるものだ。

東魚＝「娘の」は「が」の意であらう。さすれば「負公事の方へ」の句と同じ意味合ひ。

秋の屋＝同工の句であつても、初篇の方が含蓄がある。

(120) **氣のなかい遣手へ猫の行當り**

省二＝遣手といへば、額に靑筋の立つた、慾深婆々としてのみ詠まれて居るが、此句や「子の有る遣手氣はきれいなり」（金●上）など珍しい。猫が行き當るので、氣の長さを證明して居る。猫の事は二篇「京町のやり手の聲で猫の眞似」の如く、廓には飼はれてゐた。「なれて見をくる島原の猫」（萬人講）。

東魚＝部屋の外に佇んで樣子を誓く、うかゞつてゐる遣手へ、偶々部屋の障子の猫くゞりから、飛出しでもした猫が行當つたのではないか。氣のいゝ遣手とだけでは場合も場所も、一寸わからない。

秘の屋＝揚屋町へ通ふ猫であらう。

(121) **能なし猿を居へる攝待**

省二＝取りえなき者を、能無猿と罵る。お接待の時などには、氣の利かぬ者は、入口の應接係とか、或はお茶配り係とかに廻はされる。こんな句もある。「能なし猿へた

まるさかづき」（金●下）

東　魚＝この攝待は門茶の意味で、往來の人が勝手にのんで行けるやうにしてあるのだから、能なし猿と云ふ樣な人間を附けて置いて事足るのである。

秋の屋＝茶代を申受けるのでないから、無能力者でもよく間に合ふ。

省　二＝門茶說可「攝待や水くさい茶の物哀れ」（野風）

(122)　**假名を書せてなぶる金剛**

東　魚＝金剛は役者に使はれる男であるから、其役者を最負の女客などが、假名を書せたりして、なぶるのであらう。

秋の屋＝元來、金剛といふのは履物の名であるが、夫から轉じて草履取のやうな下僕を、金剛と呼ぶやうになつたもので、其多くは俳優の卵ともいふ可き色子すなはち、蔭間の下僕である。その主人は少年であるから、狎客の名を假名で書かせて嬲るといふのであらう。

省　二＝金剛の事は「明荷の馬へまわる金剛」（武●初）にも陳べた。金剛がなぶられるか、なぶるかの二說となつたが、考へると大に迷ふてしまう。前句が欲しい。

(123)　**かき立る手も眞青に石燈籠**

東　魚＝夜の石燈籠の灯をかきたてる、如何にも苔むしてゐて、其手も眞青に苔の色が反映するやうに思はれるのであらう。

秋の屋＝閑庭の夜景で、茶人の好むところである。

省　二＝心も亦眞青になる靜寂味。

前號（武玉川）正誤表

姪子生

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
三〇	上	一八	氣が●腐り	か（原本）
同	下	一	其賑しく	甚賑しく
三二	同	五	か●說	お說
同	同	八	あらら●	あろう

(108)の解の一部に就て＝八王子織物は「古クハ農家ノ副業トシテ紬織物ヲ製織シタガ天明年間桐生足利等カラ機業家ガ移住シテカラ盛ニナツタ言々」（國民百科天辭典）故に相應古くはある。

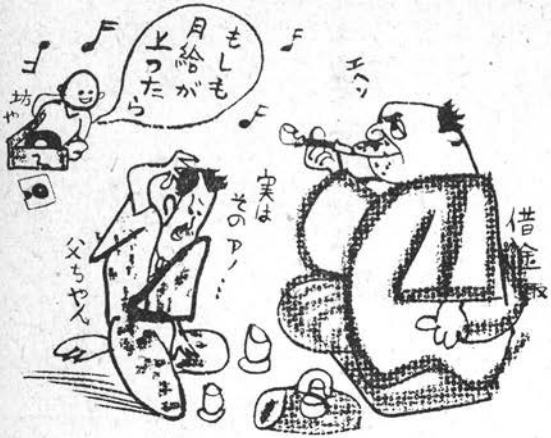
梅鉢叢書第一輯
句集　家　櫻井六葉著
四六版洋裝函入　定價金壹圓
金澤市博勞町二七西田方
發行所　加能川柳社

漫畫セクション

オサカ・マンガ・トリオ

小川武・甲貝スミ男・北幹夫

(一) 坊やの機轉



(二) 現代娘氣質

溺れる男を助けんとしたお嬢さん
「マア…お父さんぢやないの……つまんないから あたし先へ歸るわ」

(スミ男)

(三) キャンプ異變

夫「オガイ、山椒魚にかぶりつかれた、助けてくれ……」
妻「そんなものおかづにはなりませんよ」

喫茶店のAとB

―職業川柳人問題―

（二）

「職業川柳人が宣言されてから約一ヶ年經過しましたが成績はどうです。」

「赤字だよ。」

「では、あの宣言はもう撤回ですか。」

「そう簡單には撤回せんよ。」

「前途に光明があるんですか」

「光明とは、やれると云ふ見透しがついたかと云ふのかい。」

「やれるか、やれぬか、判らないものを、徒らに頑張る譯でもないのでせう。」

「そんな頑張り屋に見へるかね僕ははじめから見透しがついてゐるのだよ。僕の云ふ見透しは二年でどうとか、三年でどうとか云ふのぢやないのだ。川柳も職業人が出て、今のうちにグン〳〵仕事をしなければ、又元の木阿彌になつてしまうことを憂うると云ふのさ。量ばかり殖ヤたところで、文化文政の墜落期の再現では、多年の努力も水の泡さ。川柳の社會化を提唱した責任上、今度は職業川柳人として更に柳界の黎明期を迎へやうとしてゐるのだ。」

「志や壯なりですが、そこまで頑張れますか。」

「鬱れて後止むさ」

「悲壯ですね。」

「そうだ、悲壯だと云へば悲壯だ。その代り君等はあまりに常識的だ。君等は途に南極も北極もきはめずに死ぬばかりだ」

「頭が下ります」

「別に頭を下げなくてもいゝよ僕は頭を下げて貰ひたくてやつてゐるのではない。只誰かがやらなくてはならないことをやらうとしてゐるだけだ。昨年の『湯の村』の九月號で有爲郎君が『川柳で飯が喰へるか喰へないかといふ問題がやや眞劍に考へられてゐる。勿論現在に於ては川柳で生活する事は出來ないだらうが麻生路郎氏は將來職業川柳人として起つ事を聲明した、（中略）氏の性格から云つて川柳生活の職業化と云ひ「川雜」の經營と云ひ相當困難であらう、とまれ川柳職業人の出現は川柳を社會的に膨脹發展をさせる爲に大きな力となるだらう。』と述べてゐるが、僕はもう食へるか食へないかの問題を論じてゐるのではなくて食つてゐるのだ。あの宣言をしてから約一ヶ年が經過してゐるのだ。有爲郎君などはあの宣言を素値にうけいれて、職業人の出現は川柳を社會的に膨脹發展させる爲に大きな力となるであらう。と云つてゐるが、職業川柳人も職業川柳人によりけりであることも考慮に入れて置かれば、飛んだ結果を招かぬとも限らないよ。僕は今、川柳界淨化作用の必要を痛感してゐるのだ。それを行ふには、僕が他に職業をもつてゐては、やれつこはないと思つたから、斷然他の仕事を放棄して、川柳の仕事に一身をさゝげてかかつたのだ。食へなくなつたから川柳で飯を食はうなどと云ふのとは譯が違う。そんなことを想像して愚圖々々云つてゐる連中には僕の熾烈な川柳愛など全く判りつこないさ。損得を超越し得ない人間に何が云へやう。何が出來やう。君等も文字ではいろんな事を書くが、イザとな

つたら足踏みしたり、尻込みしたりする口でないと云ひ切れるかれ。僕の尤も信頼する「きやり」の周魚君でさへ腕を組んでみてもほぐしてみても私には路郎氏程の勇氣が出て來ないと云つてるではないか。あの正直な告白を君等はどう考へてゐるんだ。あれを默つて聞き流していゝのかい。斯う云つてはおかしいが僕が曾て公立病院の事務長をしてゐる時、院長が僕を捉へて、君位有名になつたら、もういゝ加減に川柳を廢めて、こちらへ引越して來て專心事務長をやつてくれてはどうだい。そして時々樂しみに作つたらいゝぢやないか。川柳を廢めるか、事務長を廢めるか、どちらにするかと僕の意中を訊かれた時、僕はたちどころに、今日限り事務長をよしませうと云つて立ちかけたら、院長が顏色を變へて僕をおさえた事を覺えてゐる。これは院長が僕を買つてくれての話で、僕が川柳をやつてゐるために、仕事をなまけたからではなかつたのだ。それからもう八九年になるが、その時分でも川柳と職業との取代へつこに躊躇してはゐなかつたのだ。君等がそんな立場におかれた時に直ちに職業を棄てることが出來るかどうか。おそらく考へるまでもないと云ふだらう。」

「……。」

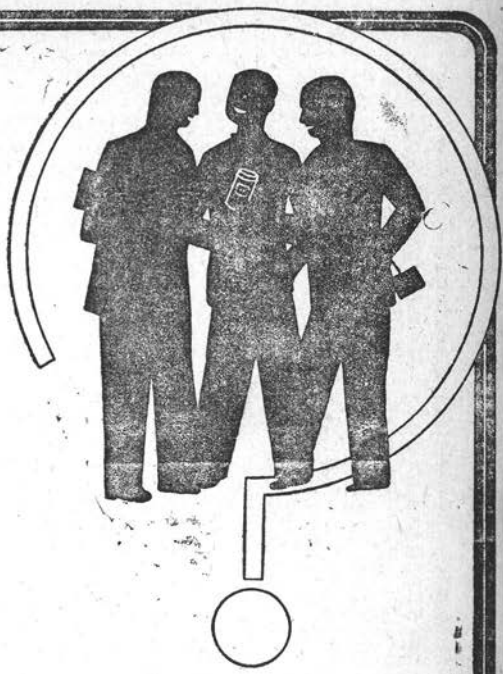
「そうだ。職業は、かく眞劍なものだ。僕は川柳を其の眞劍なものにした譯なんだ。なし得るものに對してなし得ないものが兎や角云ふべき性質のものではなからう。僕はこゝで君にいゝものを見せう。これはある柳誌に載つてゐる編輯者の聲だ。「遲刊は全く申譯がない。月一回定めた日に發行の出來る樣にと編輯子は希んでゐるのだが、原稿の都合、經濟上、なほそれに加へて一定の業務の餘暇を割いて、何もかもやらうといふのだから、さううまく問屋が卸さない。」と。又某誌の編輯者は「何よりも大遲刊となりました事を御詫び致します。私は最近、川柳あつての生活だと思つた事が再三に止まらずありましたが、全部嘘だつた事が、はつきり認識致しました、矢張り生活が私にとつては何よりの大切なものだつたのです」云々と。この筆者は趣味と生活と職業と云ふことについて、もつと認識を深める必要があると思ふが、それは兎も角として全國柳誌の多くがこの調子であるとしたら柳界の向上も發展もあつたものでないことは想像に難くないでせう。僕はこれ等の人々を決して責めやうとしてこゝに俎上にのぼしたのではない。殆んどすべての柳誌が、これ等の編輯者と五十歩百歩の狀態にあると云ふことを云ひたいのである。思ひをこゝにいたすとき、眞摯なる職業川柳人の出現は必然的にのぞましい。そして先づ隗より始めよで、僕が起ち上つたまでだ。僕が處女飛行で墜落しても、僕の次に來るべきものが飛行し得るなら、僕が墜落したとしても決して徒爾ではなからう。職業川柳人間題に尤も理解のある筆を執つてゐたのは森田一二君だつたが、僕は炬燵から掛聲をしても駄目だよと笑ひながら讀んだにすぎぬ。

「川柳研究」で座談會をしてゐたが塲あたりにすぎないし中で少しく判つてゐるんだなアと思はせたのが車山君だつた。『ふあうすと』で、陣居君や雞牛子君や東洋鬼君などが書いてゐたやうだが、何れも、もつと勉強してゐらつしやいと云びたい位のものだつた。誰だつたか、齋藤茂吉は職業人ではないが優れた歌を詠むと云やうな幼稚な議論をしてゐたのには思はず失笑した。寄つてたかつて、變な出來合の議論を浴びせてくれた人々には痛痒を感じなかつたが、海外から、職業川柳人として起つことはなか〳〵困難であらうから、失禮ながら若しも困つたら云つて來て下さい。何かとかさせてもらひますと云ふ親切な手紙を貰つたのには面喰らつた。それではお願ひしますとも云へないかれ。」

「そんな人がありますか。意を强くするに足る譯ですね。」

「しかし甘へることは禁物さ。そうした同情に酬ゆるためにも孜々として働くばかりさ。」

（つゞく）



胃酸過多症

胃痛、惡醉
二日醉、溜飲
酒・煙草の
のみすぎ

制酸・鎭痛・劑

ノルモザン錠

ノルモザン錠は、珪酸アルミニウム（醫家用ノルモザン）を主成分とし之にロートエキス薄荷腦を配した錠劑で、胃酸制止・胃粘膜保護・鎭痛の効果を併有する學理的製劑です。

ノルモザン錠は、胃壁を全面的に防護して、胃液の刺戟を去り、胃酸の過剩分泌を抑制し、胃粘膜過敏による疼痛を鎭め、オクビ、ムネヤケ、胃のモタレ、キミヅ等の症狀を除いて安全に治癒に導きます。

【價格】一日分（二〇錢）　三日分（五〇錢）　約一週間分（一圓）
十六日分（二圓）　一ヶ月分（三圓五〇）　二ヶ月分（五圓）
各地藥店にあり

發賣元　大阪市道修町　株式會社　武田長兵衛商店

川柳塔

裾模様借電話とは見えぬなり　橋本　綠雨

カーネーション二人仲よく話す也　同

一軒家二人住むのに空青し　同

債券のくじもあたらず蚊にかまれ　同

泣いた子を窓へ向けてるもてなしさ　同

若鮎が日曜の子にとられてゐ　同

まむし指きくは片眼のおばあさん　水谷　鮎美

テリヤを愛する陽の枇杷青き　同

ふるさとへ發つ後姿の母となり　同

復緣をせまる火鉢のさくら炭　同

寢ころんだ父へおちたる子の帽子　同

本心を世間話にして歸り　同

猫眠る聖なる顏をして眠る　山本　丹治

勉强をせよと悪友から便り　同

健康を祈られ左遷の驛に立つ　同

かなしみ多く夫人は歌をよみならひ　同

無言のいさかひに疲れたるふたり　同

涙より美しきものを未だ見ず　同

★

聞き上手話上手との涙　姫田　夕鐘

生活は底の底なる夕がすみ　同

さばけた人にされてる三下り　同

成金を短氣にさした流行妓　同

牛歲目に田舍にあづけし子と會ふ

すゝけてはおれど我子に違ひなし　同

母ちやんが病み俺と寢てくれる　同

病妻をまどわす如く南風が吹き　同

乘合を待たせて置いて叩頭する　後藤　青兒

國の母少女歌劇を見て疲れ　同

瓢簞に乘つてる樣な叩頭する　同

突きのけて乘つても座席ない電車　同
生活に疲れ帽子の緣もたれ　同
メンソレタームでもつけとけと子を叱り　同
淋しさはベンチの端に腰をかけ　同

市議戰三句

たそがれに貧乏市議と語る膝　石曾根民郎
立候補した大安を信ずる日　同
金緣と髭がまもなく市議にした　同

健かなる父と病める弟

子は育つものかさびしく藥のむ　同

弟の病床にて

あかくと灯せ枕のちり掃かむ　同

印刷業にいそしみて十年

十年の影のひとつと知るおのれ　同
旅情もう財布の底を考へず　大西八步
交叉點理性にそむく曲りよう　同
金になる日の米俵陽に出され　同
一錢をおしみて借りる煙草の灯　同

親しみが肩からにじむうしろつき　同

商用にて隱岐へ渡る

發動機の音乍り大きい漁村の眞晝　同
ほころびをそれとは言はず縫ひつゞけ　妹尾變人
時間です交換嬢の色氣なさ　同
書齋から出て來て子等の父となり　同
無事な顏嵐の後によく揃ひ　同

白濱にて

湯の宿の隣りも阿呆の勢ぞろひ　同
ハンカチへ息を殺した砂煙　加藤ライト
一笑にふして氣になる風呂の位置　同
新婚の貴郎と呼んで用もなし　同
辨當空落しサラリー見破られ　同
蠅叩き持てば高飛びしてしまひ　同
半玉の煙草姉妓が立つてから　鳥生古弗
氣立こそ十人並の上にあり　同
借金を返す張合あるくらし　同
むつちりとしてゐる彼の碁は强し　同

見覺えのある顏記憶さかのぼり　同
忘れずに居てこそ女の生きる道　朝田　新水
座蒲團は戀人ならぬ猫が敷き　同
貞操は親の世話までさせられる　同
公衆電話に双方は待つばかり　同
同情の價値なき君の寢不足よ　市塲沒食子
不埒者ながら子供もあるさうな　同
出資してあるので世話をやきにゆき　同
返禮のこゝにものぞく虛榮心　同
金借りに來て自動車を待たしとき　西　いわを
巡禮の包の中にある鏡　同
聲かけた社務所は留守か庭廣し　同
子澤山布團の山をさか落し　同
健康な足で持込む賴信紙　宮岡　白峯
飛車押して押して大阪よいところ　同
昇進の君を案じるさくらんぼ　同

山を見ぬ日々お茶の色迫る　竹内機見女
いゝのよいゝのよみんな死ぬのんよ　同
夢に來る人の數々草しげる　同

＊

子を持てばわかる話が氣にさわり　長崎　柳秀
出養生間借と見えぬ伴をつれ　同
風船をその一息にわつた顏　同
蛇の目傘嬉しさうなる顏を染め　同
流しもと葱に泣いてる赤手柄　同
どう見ても古稀と思へぬ顏の艶　同
無き母の事に長女は觸れじとす　池田　可宵
父ちやんで暮れ父ちやんで明ける哀れ　同
讀んでゐるものみな悲しいヒントのみ　同

次男病床五十日

兵隊の眞似などしてたこのお手手　同

美髪は紳士道！

御使用後とてもスマートな灰皿になる新案容器！

フケ・カユミを止め白髪・若禿を防ぎ明朗な青年美を創る伊豆椿ポマード

頭髪のホルモン劑（コレステロール配合）

伊豆椿 灰皿ポマード

植物性　五十錢

全國百貨店・有名化粧品店
藥店、小間物店にあり

伊豆椿香油本舗
大槻彩芳園

柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一擧手一投足をこの展望欄で、すぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。

催

▲本社六月例會は六日夕誓得寺に於て開催、西田艸樂君が「旅のことども」と題して妻君帶同の旅行談をやり、例によつて植物の話を一トくさり、合の手にノロケを入れて笑はせる。近ごろにない和やかな會だつた。▲本社名古屋支部開設その創立句會は六月廿日夕中區鐵砲町の長圓寺に路郎主幹を迎へて開催旭映孝三郎、のぼる、可香、七敞の錚々たる諸君等の來援で盛會裡に終了、散會後タチソウに於て路郎主幹の歡迎宴を催された。▲御所車川柳社（京都）では三周年を迎へられたが六月二十日夕四條繩手東仲源寺でその紀念大會を開催された。▲住友金屬鑛業所親友會（尼崎）の阪本遠見路君が吳に入團されるので親友會ではその送別會が六月六日カナメ食堂で催した。同君が久しく師事されてゐた路郎氏、艸樂氏に列席を乞ひ句宴を催された。▲大連川柳社（大連）主催による在滿柳人の作品を一まとめにした滿洲川柳句集發行の計畫が發表された。即ち投句者は滿洲在住柳人に限るとのこと。問合はせは大連市能登町一〇同社へ▲本社の第二回青空の下の句會は六月十三日決行。廿頁參照。▲本社松江支部の六月例會は八日幹事山川兒君の宅で開催▲川柳國發行所（大阪）では六月十五日航空愛國普及神風號凱旋祝賀句會を大阪細菌研究所に於て開催。▲六月十一日本社鶴町支部の句會を鳳町の變人居で開催出席者十名、青葉の眺望を意のまゝに句筵は酒筵となつて一

『武玉川三篇研究』を讀む（三）

潁原退藏

(34) 我ものと思へは遠き三世相

あまりに周知の事であるから、特に附説するにも及ばないかも知れぬが、やはり其角の有名な句「我が雪と思へば輕し笠の上」に基いて、小唄の文句となつたり一種の諺化したりした「我が物と思へば輕し笠の雪」をもぢつた力調であらう

(35) 出家にしても末の松山

末の松山は東魚氏説に贊。用例はかなり多いと思ふが、さしあたり武玉川その他から少し拾つて見ると、

齒ぎしりをして末の松山（十篇）
しら双をふんで末のまつ山（十五篇）
奉加帳出すえの松山（十六篇）
身を盗せてすえの松山（眉斧日錄初）

等がある。古歌の意により、かつ末といふのに因んで末まで添ひとげる、又は最後にはつれ添ふといふ程の場合に用ひてゐる。又略して末の松とも言つて居る。

その時は熱で言ふたに末の松（四篇）

（この句享保十一年刊沾德追善集白字錄に見える風藥の附句。所謂はめ句であらう）

若い時泣た手がらは末の松（七篇）

原句の意はやはり異性間の戀で、たとひ何かの事情で出家させられても（にしてもは、親か周圍の人かを主語にした敍法）末は契りをかへず添へとげるといふのであらう。

【追記】

(14) 寺の名の立夜の大名

武玉川十六篇に「御鷹も泊て星のふる寺」といふのがある。やはり鷹狩などで田舍の寺にでも大名が一泊した場合の事であらうが。今まで名も無かつた寺が、それで急に人々に知られたといふのである。夜はたゞ泊つたことをきかせただけか。

消息

▲橋本綠雨君（大阪）は五月廿六日伊勢へ參拜二見では初夏の海を樂しまれた。▲淺謙公君（大阪）は神經痛で久しく靜養してゐられた由一日も早やく御全快を祈る▲伊藤瑤天君（東京）は東京毎夕新聞編輯局嫁樂欄川柳選者として勤務される事となつた▲渡邊曉童君（今治）の報告によると本社今治支部の人々の昭和十一年度の句集を宵明君によつて目下編輯中との事▲榎田柳葉女史（靜岡）は五月六日名古屋に一泊近江八景遊覽後京都に一泊して歸岡された由。▲池田可宵君の子息は中耳炎を患らひ危險性狀態が續いてゐられる由一日も早やく御全快を祈る▲生田翠夢、櫻井圓角、福田香雨の諸君は六月五日夜行で東尋坊に立ち折からの雨に模湖とかすむ水平線といでゆを樂しまれた由。▲姫田夕鐘君（大阪）の夫同俗塵を洗つた由。▲京都川柳社と川柳國の共催によつて六月廿日午後山崎驛前妙喜庵で川柳山崎合戰の會が催された。▲本社廣島支部六月例會は廿五日開催された盛會だつた由。▲川柳みちのく吟社（青森）では五月廿三日弘前支社創立句會を開催。

(68) 卷紙の二重心は跡へまき

東魚氏説に贊。一度書終つてから更に又考へが變つて返す書にしたから、二重心であらう。二重は紙の緣。

(71) 正平紋に佗る大兵

正平紋の事は守貞漫稿十六に詳しく見える。切付紋とは似て非なもので、同書に「(前略)又右の如く、洗ひ去らず切付ざるには、胡粉をさき膠を和し、舊紋を塗り白め、而後に上繪す。是を正平紋と云、甚見苦し」とある。これで句意も自ら明かである。即ち風采は堂々たる大男だが、この見苦しい正平紋の衣服には閉口して居るのである。「佗る」は東魚氏説通りの意。

(72) もしほ燒伊達はなけれと瓦かな

擔籠の景を移す程の事は出來ないが近く今戸の烟を望む風流はあり。

(83) 櫻川西瓜の皮も流れけり

特に謠曲と關係させた句作りであれば、とにかく、たゞ櫻川とあれば、江戸人士はやはり愛宕下の櫻川をすぐ思ひ浮べたであらう。この句もそれで差支へないと思ふ。事實名は美しい櫻川——江戸名所圖會によれば、古くはやはりその畔に櫻樹があつたからの名であるといふ——であるが、町の間を流れて行くので、西瓜の皮も浮べば鐵物も沈んで居たらう。

(95) 基佐を取殘す大原

基佐は宗祇・宗長と世に並び稱せられかつてこの三人は大原十如心院で四十番の附句を試みた事もあつた。名高い「大原三吟」である。しかるにその後宗祇は「新撰菟玖波集」を撰するに當り、基佐の人となりを厭つてその作を一句も採らなかつた。それで基佐は憤つて「逢見筑波錢便入、不論上手與下手」と作り、又「足なくて登りかねたる筑波山和歌の道には達者なれども」といふ落首があつたと傳へられて居る。句はこの事を言つたのであの名高い大原連衆の一でありながら基佐一人取殘されたといふのである。なほ露字を質においた連歌師については種々に傳へられてゐるが、これを基佐に附會した説があつた事は記憶しない。

(99) 娘か逃て追人なくなる

たゞ一人で逃げたのならば、追人志望の男は大勢居るのだが、これはちやんと相手が定まつての駈落であらう。追人がないのは當然である。

【追記】露字を質に置いた連歌師について翁草百二十には櫻井元佐(本ノマヽ)と傳へて居る。なほ外にも傳へたものがあるかも知れないが。とにかく氣がついたから追記補訂するただしその確實性に至つては勿論保證の限りでない

人は四月から健康を害して郷里德島に歸つてゐられる、最近快方に向はれたとの事だが揃つて歸阪される日を待つてゐる。▲西田艸樂君(大阪)は六月八日愛孃を伴ふて再上京、山雨樓君を丸の内の保線課事務所に訪れられたとのこと。▲病氣療養のため郷里松江に歸つてゐた岡崎祥月君は全快と共に再び神戸市葺合區磯貝通四〇ノ一久保田商店へ▲石室ぎん君(ハルビン)は六月一日から耳を患つてゐられる由、御全快を祈る。▲本田溪花坊君は六月十五日付で黑部峽谷を探り平湯温泉へ來ましたとの便りを寄せられた。▲武玉川六月號正誤表に添えて姪子省二君から「秋の屋翁の御通信に多少元氣を取戻し武玉川終りの方二百五十句許り此際すまして三編完結し置くべく先月末より輪講中淨書屆ける日も近からむ」とのお便りを頂く。▲谷心府君(今治)は此度都山流尺八師範の免許狀を獲得谷都玄と號される。▲阪神電鐵社内創作品展覽會が五月廿二日から一週間開催、本社梅田支部同人は川柳を出品(短册色紙スタンプ川柳)一等賞狀鮎美君、他の入賞は斗風、冬扇、靜波、朔風、由布、卜居、夕人、大嶽

一路集

募集句

退社

前田雀郎選

退社してから老ひの身の愚痴多くだまつて友の退社の荷をくゝり　斗風
憎まれ通して課長の退社説知らぬ間に後釜が出來馘になり　朔風
五十才退社手當を待つばかり　廉天
退社するこゝろ新社員にやさしタイピスト退社する日を秘め續け　龍域
退社した父と一緒の朝御飯社を退いたことを默つて春をゐる　三巴
退社の辭眞上で鳴つた大時計朝の味噌汁退社して思ふこと　葉光
退社して月のまるさも久し振り　水客
退社してラヂオ體操へも起きず　曉童
退社する顏女事務見直され　同
女店員退めて日本髮で來る　鮎美
退社する日の下駄箱の埃を取る　古心
退社する心算それから眞面目なり　同
退社して心置きなき原稿紙　同
退社する今日ゐデスクの染みを見る　沐天
退社して忘れ勝ちなる身の廻り　同
退社してからは通らぬ交叉點　斗風
身代を減らした上に退社する　同
投函の日附はつきり退社する　新水
立話退社の理由だけ話し　同

五　客

退社する　嶮下僚に　迎へられ　三巴
退社して棚など吊つて呉れる父　さわだ
退社してふと借金を想ふなり　斗風
面倒な話退社後もつゞき　新水
突然に退社を言ふて羨ませ　沐天

人

退社して妻を味方に生きてゐる。　新水

觀月、遊歩、翠陽の諸君で氣焰をあげた。▲宮岡白峯、加藤ライト（大阪）の二君は六月廿日名古屋の本社支部創立句會に出席、廿一日谷汲寺、養老の瀧を見物して歸阪。▲多喜健一君（東京）は別掲の所へ移轉されたが「酒はどうにも不味いので大阪から取寄せて居ます、食物にも困つてゐましたが此頃はいくらか慣れて來ました「落付けばこちらの味が嘗はられ」の句を寄せられた▲勝谷山川兒君（松江）は近頃退廳後野球の練習で眞黑になつてゐるとか。

慶弔

▲「川柳風呂社」の米江庄介君（松江）は五月十日華燭の典を擧げられた由お喜び申上げる。▲山路星文洞君（東京）の宅では五月二十五日三男を儲け「尙重」と命名された由、祝意を表する。▲鈴木一潮君（近江）は四月廿八日結婚された由。お喜び申上げる。▲豊田千龍齋君（神戸）は五月十六日永眠された。明治時代に活躍されてゐた人哀惜。▲寺井紅太郎君（東京）は千葉大原の自宅で病氣加療中六月八日午前二時卅分逝去された。謹しんで哀悼の意を表する。▲青森川柳社同人中村四郎君は六月五日長

地

退壯する社長の老ひにふと氣付き　五扇子

夫人

一點句

オカツパがいつの間にか令夫人　流葉
皺たゝきとひ様に夫人のコムパクト　さわだ
新化粧法やゝこしい名の夫人　古心
ベット冷たく夫人を欺く　朔風
髪結へば淋しい顔となる夫人　新水
空閨の夫人を包めおぼろ月　葉光
株主の發言權をもつ夫人　五扇子
落魄を語る夫人の顔のしわ　南濃路
ヅカの灯が思ひ出となる日の夫人　沐天
花へ出る夫人姙娠三ヶ月　曉童
橋わたる夫人へ虹が美しい　鮎美
ちり鍋へ夫人の箸がうごき　同
派手好みな夫人一家の自由主義　柳坊
應接間夫人冷たい顔で逢ひ　同

佳吟

榮轉は夫人同志を悲しませ　文庫
噴水へ立つた夫人へ風變る　曉童
夫人同伴日本の春にあこがれて　觀月
前子爵夫人をめぐるスキャンダル　朔風
居並んだ夫人亭主の地位の順　三巴
夫人ただ一人靜かな春の庭　水客

天

退社してラツシュアワーに乘り切れず　流葉

住田亂耽選

九官に淋しい夫人のぞかれる　葉光
令夫人世辭の頭の列を抜け　沐天
司會者の夫人孔雀の様に立ち　幹春
新聞の小說夫人意見あり　集
買物を夫人は届けさせたがり　同

三　人　オ

葉櫻を夫人秘密のまゝ迎へ　水客

地

歌澤の聲で夫人は少し妬き　三巴

天

寄附帳へ氣弱な夫人眼を通し　五扇子

（選後に）いゝ句が澤山あつたので、嬉しく見せていたゞいた。殊に、新水、鮎美氏等、川柳的に同じ釜の飯を永年一しよにたべて來た人たちの句及び、曉童、葉光、沐天、觀月、三巴氏等、健吟古豪を以て鳴る人達の句にはからずも接したことは、ランタン一生の榮であるとしみ〴〵ありがたかつた。

「三才」の句は、夫々いゝ所を捉へて課題を巧にこなしてゐられる。よく味つていただけば幸甚。

逝された遙かにお悔み申上げる。▲伊志田孝三郎君（川・協名譽會員）の令閨は六月廿一日午前十時四十分逝去された謹しんで京悼の意を表する。

轉居

▲大西洋君（大阪市西成區千本通三ノ二三持田方へ）▲福神千兩君（大阪市住吉區杭全町八八六へ）▲安井八翠坊君（新京西五馬路四七へ）▲川柳芥子粒吟社（東京市淀橋區東大久保町二ノ二六九山田蒼方へ）▲清水米花君（東京市澁谷區幡谷本町一ノ五六へ）▲辻遊歩君（兵庫縣武庫郡大庄村西字東ノ口三四二へ）▲飯尾清柴君（尼崎市中大物町六八潮方へ）

改號

▲森田白舍君は白林▲弘津骨人坊君は慶一▲鳥生枯佛君は古弗

其他

▲阿部佐保蘭君（東京）は近時川柳の飜譯について熱心に研究してゐられるが、今度柳界並英獨文界の第一人者を顧問とする川柳飜譯研究會を創立、同君方に事務所をおき川柳飜譯完成促進運動に拍車をかける事になつた。既に宮森麻太郎、村田周魚、麻生骼郎の諸氏に顧問承諾を得てゐるがこの方面の研究にやうやく機運がむいて來た事はよろこばしいことである。尙この會の趣旨に贊同の方には柳派を問はず自由な立場で入會後援を歡迎される筈。

各地柳壇

いのちある句を創れ

規清投稿

一、用紙は原稿用紙又は投句箋の事
二、文字を正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月廿五日とす
五、投稿先は本社宛

六月本社例會

六月六日　於　誓得寺

兼題　鰻(路郎選)、肩(鮎美選)
席題　女形(かほる選)、書齋(白峯選)、繩張(沐天選)、修繕(豆秋選)、根負け(互選)

まむし屋の　戰術　香りあぼぎ出し　麻　丰
鰻ニヨキ〳〵女將もてあまし　峯月
腰掛で鰻とカツの一思案　流葉
立ち止まる硝子へ鰻腹を見せ　入仙
食倒れ數字で示す土用丑　王京子
盛場の朝トラックで來た鰻　友帆
後ろから見ると鰻が燒けて居る　聞路
美味かつた鰻に街は時雨てゐ　小柳子
露路は鯖向ひは鰻燒くにほひ　白峯
一疋の鰻役者の家に住み　かほる
鰻まむし坐蒲團がきつく汚れてゐ　艸樂
たゞ貰ふやうな紋日の鰻めし　蔑乃
大阪の鰻水道の水に生き　美知夫
結局は人にたのんだ鰻なり　同
妾宅へ鰻が屆く春の雨　一風
榮轉の鰻にされる漫畫欄　同
鰻燒く煙も淡れて黃昏れる　三猿子
腹裂けば魚の姿になる鰻　同
口紅をなほして出雲屋を出たり　豆秋
トラックで鰻の命搖れてゐる　同
高野まで登つて鰻食はれたり　同
鰻屋で犯人らしい噂きく　いわを
鰻の香を中に十年ぶりの友　友帆
劇場でもまれうなぎ屋でもまれ　變人
鰻屋の娘うなぎの顏に似る　路郎
包紙に鰻圖案化されてゐる　同
戎橋肩をたゝいておごられ　王京子
うしろから呼ばれ豆腐屋肩を換へ　毬夫
まりを取る足に汚れた兄の肩　美知夫
娘の肩をたゝいた春のくちびるよ　白峯
支拂が氣になつて來た肩のこり　いわを
肩へ手をかけて親切日が暮れる　變人
肩たゝかれただけでかへつた若旦那　里十九
戸主となる後ろ姿の肩の中　聞路
うちあける男の肩を叩くなり　同
クーパーを後ろから見る肩の中　豆秋
肩叩く兒へ痛い顏して見せる　同
肩張つて戀のカルピス吸ひあげる　艸樂
肩と肩擦合ふ二人へ葉が靑し　同
勞働をはつきり見せる肩がぬけ　峯月
ひとり居る心に肩がかゆくなり　小柳子
ブランコを一人動かし肩を張り　かほる
俗物と言ふ肩君も醉ふてるれ　鮎美
やゝ肩をはる氣味があり父に似て　同
樂屋口女形よと云ふ女　紫浪
女形ごつかしらんに女めき　ライト
女形お午の夜店へさしかゝり　里十九
女形廊下でフワンが呼止める　いわを
照明を一つにあびた女形　靑兒
女形かしこまつたり笑つたり　岩石
女形今一息の化粧する　同
若樣の後ろにずらり女形　聞路
女形　笑へば動くのゞ佛　同
巡業の驛女形ふり向かれ　入仙
細卷を進めて吳れる女形　同
女形　鏡に思ふ事があり　同

書齋から聞へて來るはハーモニカ　南天
本箱を置いて書齋といふ氣持　毬夫
ぢかづかと書齋へ通る飲み仲間　一風
書齋フト萬年筆の置きどころ　岩石
寫眞記者書齋へ夫婦並ばせる　聞路
荒らされた書齋近所の子ら交り　友帆
泉水の緋鯉が見える書齋なり　いわを
書齋から見へる風呂屋の面白し　里十九
猫なればことはりもなく書齋へ來　艸樂
失戀の果てを書齋に立てこもる　南濃路
逆境の書齋に今日の本の艶　同
從順な妻は書齋を遠ざかり　入仙
終電を遠く聞いてる書齋の灯　同
御書齋のベルは茶を言ふだけのこと　沐天
蒼白い顔が書齋の壁に似る　同
書齋から出て來た帶が解けてゐる　青兒
書齋にも春鶯の聲を聞き　同
徹夜した書齋支那料理をはこび　鮎美
書齋畫元氣な兄がやつてくる　同
繩張の仁義少さな星の下　一風
繩張をあらすつもりの意地を立て　毬夫
辻易者繩張を守るヒゲなのか　峯月
繩張りの結局は女の事でもめ　南天
惡童が繩張りにする工場跡　三猿子
繩張りの聲に火の手が又上り　入仙
繩張の向ふに地獄の叫びする　路風
繩張りへ男の意地のおきどころ　變人
旅芝居親分さんへ仁義に來　形水
繩張りといふ顔と同じ廣い兵古帶　亞鈍
繩張を護る髭なりそりもせず　美知夫

繩張の中で子供も鈴を振り　同
繩張に三千圓の夢の列　王京子
繩張をちよつと擴げた紙芝居　同
繩張へ夜店の灯未だつかず　青兒
繩張のうしろから來た神風號　同
義理堅き繩張親の名に免じ　南濃路
繩張へあつさりゆづる屋臺店　同
繩張のもつれ道頓堀をそれ　岩石
入智惠をされ繩張へ言ひ掛り　同
繩張へ文句をつける闇の底　同
江戸を賣つて來た繩張のケチ臭し　艸樂
繩張の法被が目立つ新世界　同
繩張りへつめたくなつた酒を呑む　白峯
繩張りへ派手なもんくが迫るなり　同
繩張りへ女こまかいなと笑ひ　同
繩張を爭ふ眼鏡黑いなり　同
心臟の躍動へじやまな繩張りよ　同
繩張つて瑞穗の民を虐たげる　沐天
修繕の縫目が目立つ春の服　岩石
世帶馴れ修繕さして置きました　南濃路
如才ない男修繕頼まれる　友帆
修繕をして流線型にする　沐天
修繕へ女買値も言ひ添へて　白峯
修繕へ大きな釘が裏に出る　青兒
修繕に觸れず家主遠く住み　艸樂
修繕の大工が猿に似てうれし　鮎美
蝙蝠傘修繕に或日ぼられたり　葭乃
修繕は釘一本で足りるなり　美知夫
なんとかなりまへんやろかと底の抜けた靴　同

自轉車の修繕ぐらいする養子　聞路
修繕の匂ひの中に來る花輪　同
修繕へ女の口のやかましさ　變人
修繕をしてだまされたことを知り　同
根負けがした北風の莫の火　美知夫
根負けをする親心知つてゐる　一風
根負けへ互の顔のあつけなさ　紫浪
根負けをして交叉點サツと越へ　岩石
根負けへ相手はさうざ癪てしまひ　聞路
根負けの眼が又してもぶつつかり　王京子
根負けは泣く兒抱かへるベンを置き　ライト
根負けがしたかラヂオを賞めて去に　友帆
根負けをして商賣になつてゐる　變人
太陽をにらんで根負けしてるなり　同
一錢をれだる根氣へ父が出し　艸樂
根負けの顔で贊成してくれる　同

阪大川柳會五月例會（大阪）

丸島利生報

巢、雨傘、雜吟、借物

愛の巢をあてられて出るひとり者　柳秀
家鴨とは知らず巢入の鷄はだき　同
愛の巢といふ報導で隱れてゐ　千秋
君の巢に案内しろと醉ふてゐる　たけを
愛の巢を記者無遠慮に書き立てる　君女
愛の巢に今年は上る鯉幟　春巢
鳥の巢のやうな頭で起きて來る　路生
愛の巢は隣の音もよく聞え　栞
君もかと古巢の夜は暖し　同
當分は二人の外にない塒　方正

お仕事も盛ん巣へ行く足も増し　同
その一人病んで愛の巣鍵が下り　利生
氷雨降り貸傘寒う宿を立つ　真三
色街は雨傘乾して午近し　同
袋露路雨傘ほして置く所　同
雨傘を辭して軍服濡れて行き　春集
雨傘の心齋橋が狹いなり　同
出迎の傘へ先生の聲がかれ　柳秀
牛圓の傘が悔いてる雨宿り　同
ランデブー雨に目だゝぬ傘もよし　同
蛇の目傘色の白さをすごく見せ　同
雨傘を片手であける懷手　同
貸傘は禮を言はれて減ってゆき　路生
天狗風も吹かず雨傘干してある　栞
兩傘の雫を切れば昨代めき　栞
雨傘を忘れて歸る術もござゐ　同
立話傘の一人は見えぬなり　同
廣告のつもりの傘を貸してくれ　同
紅葉傘柳にふれるバスを待ち　同
雨の宵歸しともない傘を貸し　君女
看板を見る雨傘が那覽になり　たけを
貸傘が目立つ道頓堀の雨　同
にはか雨破れた傘も引出され　利生
手に雨を受けて番傘借りて行き　君女
雨傘の雫かかってバット賣れ　栞
雨傘の油ぎってる音で聞き　春集
割引のバスはれむたい顔をのせ　路生
與太もんのやうに蝙蝠さんである　同
幾ら食ふか分らぬ食券買うて入り　春集
一本貰ふシガレットケース褒め　同

雨の日に儲かりそうな株屋街　同

花既にうつろへる楠花溪にて

花よりも團子が花のない不服　春集
緣談が傷持つ胸を抉りに來　方正
小商ひ今日も嬉しい儲けだか　柳秀
お女中の居づかぬ譯は子澤山　同
野心家の嫌はれながら成功し　君女
三昧のなる路地あり猫が顔を拭き　正柳
ターキーは此んな家に住む主婦の友　たけを
成功は天裕といふ事にされ　利生
人だかり鼠が死んでゐるといふ　千秋
借物のくせに大きな口をきゝ　たけを
借物でれと妓煙草の息をかけ　青一路
末席は手首の長いモーニング　真三
紋所がちがう羽織が氣にかかり　柳秀
借物の袴は直ぐに疊まれる　路生
死は清し借物返へす心組み　方正
日の照りを恐れるやうに借り着行く　同
借りものと言はれて女むきになり　利生
借るときはあっさり云ふて持ってゆき　同
今夜だけと言つて指環をかりられる　同
借物と見えぬといふは母であり　栞
借物ぢやござんせん仲間です　同
借り賃のつもり土產を持ってくる　利生
借物でないは白足袋ばかりなり　路生
借物のノコで日曜汗をかき　路郎
借着した代理名刺を渡される　同
借着して今更僕は背が高し　同
借物の時計で脈を診てもらひ　同
結婚の明日は坐布團まで返し　同

川柳雜誌社

松江支部句會（松江）

五月十日　於なにわ旅館　勝谷山川兒報

さくらんぼ、銀行、保險、遲刻

セル、鮃

葉櫻に風ありさくらんぼが覗く　柳人
ランデブーの肩とすれ合ふさくらんぼ　祥月
さんらんぼビールの泡を親しませ　柳人
さくらんぼ一對一の人ばかり　山川兒
さくらんぼ戀を忘れた瞳に赤い　柳人
さくらんぼこゝはみどりの風のおと　梟人
櫻んぼ少女の頰の艶に似て　三雷波
さくらんぼちつと五月の陽を反す　山川兒

住友銀行

財閥の制服でゐる黑サージ　梟人
明日燒ける樣に外交員すゝめ　都之介
保險料拂つた夜の風を聞く　梟人
保險屋の靴がちびてる十一月　笑鬼
保險屋の自轉車パンクして日暮れ　同
遲刻した事が傷なり通信簿　祥月
課長より早い遲刻でつゝがなし　山川兒
教室へ遲刻うつむき勝ちに來る　三雷波
遲刻した社長は別な卷煙草　一湖
遲刻して隣を落す帽子掛　都之介
妻未だ若くてセルのポーズ佳し　都之介
慰安會母の好みのセルを着る　大鳥
ウヰンドのセルに女の眼がちがひ　笑鬼
セルで來てつゝじの茶屋の派手なこと　柳人
鮃には共通性の異人館　同

油蟲鼾の上へ落ちて來る　都之介
今治水つけて鼾をかいてゐる　笑鬼
空鼾をんなの頬がよつてくる　山川兒

川柳雜誌社　**梅田支部句會**（大阪）

五月二十七日　於遊歩居　遊歩報

分家、鯉幟、神風號凱旋、短冊

夕涼み分家の嫁の美しさ　斗風
豆ごはん分家とおもやの仲がよし　遊歩
内祝分家の方が先になり　鮎美
分家して表札を買ふうれしき日　冬扇
蓼を打つ音に分家の晝ふかし　朔風
にわとりも飼ふて分家の初夏の朝　卜居
支那からの手紙分家へ届く也　鮎美
庭越しの分家の藤をほめて飲み　朔風
分家して當座は母が泊りに來　靜波
鯉のぼり隣の屋根へ垂れかゝり　同
夕燒の空からおろす鯉のぼり　朔風
闇空へおろし忘れた鯉のぼり　同
空かける鯉の氣持ちになつて見よ　夕人
さも裕福そうな芦屋の鯉のぼり　冬扇
眞鯉緋鯉腹一つばいの風にゆれ　朔風
貧しくも小さな鯉を立てゝやり　靜波
鯉のぼり鍼灸院の屋根が見へ　同
貧弱な我が子の鯉もふくらんで　卜居
鯉のぼりタラリと垂れて風もなし　靜波
觀光の京都で見てる鯉のぼり　斗風
短冊の一さこ讀めぬ同志なり　靜波
短冊に殘る剛氣な父の筆　卜居
短冊を手に一茶忌へ深む秋　朔風
旅情ふと宿へ短冊のこしさき　斗風
春雨の窓で短冊書かされる　同
墨うすき短冊姉のかたみなり　同
短冊を病氣見舞にくれる友　冬扇
短冊かよし〳〵僕も醉ふてゐる　鮎美
短冊へ君の眼鏡のさびしまれ　同

川柳雜誌社　**天王寺支部句會**（大阪）

四月十七日　於葉光居　山本葉光報

貼紙、ニキビ

貼紙は出鱈目ばかり紹介所　蝶の助
貼紙をめくつて敷金を負けてやり　葉光
價上りの貼紙儲け薄くなり　同
剃刀はニキビをよけてよけてゆき　豆秋
年頃のつらいニキビをからかはれ　其奥
ニキビなぞ問題でない講議錄　蝶の助
草に寢てニキビをつぶす春の風　同
先生のニキビを早熟た子が見つけ　葉光

川柳雜誌社　**今治支部句會**（今治）

五月廿日　貯蓄銀行支店内　月原宵明報

師、家風、男性、松笠

師の遺墨緣なき人の手に渡り　香方
趣味の藝看板として未亡人　文庫
お師匠のうしろ姿に風白き　宵明
ハイキング羽織着てゐるのが師匠　文庫
桐の花師匠の戀の思出よ　曉童
痛そうな音で師匠は膝を打ち　心府
いざ稽古さなれば師匠は醉つてゐる　同
次男以下家風に合はぬ嫁をとり　文庫
文化さは別に家風を守りゐる　宵明
子の代になつて家風も改まり　心府
家風など無く晩酌にさろりする　文庫
御馳走の中に家風が盛られてる　心府
家風ばかり言ふて生活にふれさせず　曉童
あきらめる言葉男性的と云ひ　香方
新聞で男世帶の火が起り　心府
廣告で賣る「男性美」われも飲み　香方
女性から見れば男は利己主義者　文庫
男性が贈る詩集は戀の使者　同
男性の歡び五月五日の陽　曉童
男性の醉スクラムを組んでゐる　文庫
男性の不平一ばい飲んでから　同
男性へ夏は嬉しくひらけゆく　曉童
男性へ入道雲が湧いて來る　心府
男性を批判してゐる美容院　宵明
松笠がかさりと春の山眠る　心府
松かさが遍路の笠ではね返り　同
松かさも一緒に降る下り坂　同
松かさを見上げたさこに晝の月　曉童
松かさの人形都へ出て稼ぎ　心府
松かさの溢るゝ下に遍路の荷　宵明
松かさに自力更生敎へられ　香方
松かさが光りの中へ一ツ落ち　宵明
松かちの火にふるさとの夢がある　曉童
松かさで母子二人の湯がたぎり　心府
掌の砂のごさ思ふ事くづれゆく　同
ピーチパラソルそこらの砂は盛り上り　宵明
海水着去年の砂がこぼれおち　心府
陽炎の砂へ不動のやうに立ち　同

どれつたく年増は戀の砂をけり　曉童　文庫
砂へ足埋めて夏の陽目へ感じ　同
下駄持つて砂の感觸こゝろよし　同
青く濡れたる月明の砂　曉童
曉だ砂も生命を持つてゐる　宵明
盛り上げた砂子供らの匂ひあり　文庫
砂煙呼吸をころして バスをさけ　香方

川柳雜誌社　**簸川支部句會**（島根）

勝部海棠報

横、幸福、うたゝね、無理、人絹
ニヒルな現實は切りつめた人生に横たはり　杏夫
横向いた女の鼻のにくらしさ　杏わだ
晩酌がほろりときいて横になり　源太
初夏の土堤牛悠長に横たはり　獨仙
眞横から見れば何でもない戀をもち　凡溪
横顔の線へ憂固な意志を見せ　木馬
何時迄も〳〵此のまゝ居たいひと時よ　杏夫
幸福を新妻の衿に見てゐたり　綠之助
嬉しさを花にさゝやく宵の庭　さわだ
現在を幸福として共稼ぎ　獨仙
幸福の絶頂にある酔が出る　草路
うたゝねへ蛙の聲のかすかなり　凡溪
讀書から本はいつしか枕なり　源太
うたゝ寢の子へ足音を叱られる　獨仙
うたゝ寢の妓へ情痴の灯がともり　凡溪
ころび寢の畳の跡をつけて起き　木馬
うたゝ寢の欠伸五月の窓へ捨て　獨仙
うたゝ寢の夢初夏の戀となる　綠之助
無理にとも言ひかれ母の苦勞性　凡溪
無理を言ふ妓へ返事かるいなり　同
無理な一手破綻はたちどころ　綠之助
隅つこで無理な酒をば呑んで居る　木馬
生きるため無理を知つての居催促　綠之助
遠くから友の人絹よく光り　源太
こぼれお茶人絹の娘をあはてさせ　草路
人絹と見こし値ぶみをする憎さ　木馬
人絹の羽織車中で立ちつゞけ　同
もう一反貧けて人絹賣りつける　凡溪
一日のつかれ人絹のしはをのす　綠之助

川柳雜誌社　**廣島支部句會**（廣島）

五月二十一日　於廣鐵倶樂部
濱田久米雄報

鐵橋、財布、神風號凱旋、酔ふ
鐵橋へ顔が並んだ汽車の窓　昇玉
追はれてる螢鐵橋に飛んで行き　きよし
鐵橋と手を振り合つて漕ぐボート　須彌山
讀みさしの本鐵橋の音で閉め　久米雄
鐵橋を殘して橋が二つ落ち　秋史
鐵橋のあちらは綠展望車　九天
母の香が殘る財布の花模様　紫溟
留守番は吝な財布を預けられ　秋史
妻と子を思ふ財布を固く締め　久米雄
集金の財布手荒く擴げられ　同
おみくじも入れて財布は腹を張り　昇玉
確つかりと財布をくゝる齡となり　草雲子
團參にいつも遲れる縞財布　きよし
神風が母國に歸る世界地圖　九天
もう歸つたかと號外の神風號　星州
神風號日本の力見上げさせ　昇玉
歡迎のあらし一機の音迫る　久米雄
神風號凱旋母國は鯉のぼり　九天
神風號手旗の波の中に降り　昇玉
凱旋へ故國は初夏の風が鳴り　久米雄
不仕末は酒に皆罪かぶせ居り　きよし
この道も狹いですよと酔ふた足　星州
勸定日財布の音をさせて飲み　秋史
酒亂ふと氣付いて痛いとこぼかり　同
ほろ酔ひの父父らしい唄となり　九天
世の中がみんな愉快になつて酔ひ　秋史
一合の酔でぐつたり長く寢る　久米雄

川柳雜誌社　**鶴町支部句會**（大阪）

五月三日　於ライト居　宮藏白峯報

若葉、同情、握る、色眼鏡、自信
バイオリン
何處からか風鈴の鳴る若葉影　小仁翁
若葉嬉しく末を約する　ライト
子を抱いて若葉の側で寫させる　寛柳
ステッキが輕い若葉の山の道　よしみ
一入子の鯉へ若葉の風があり　岩石
集印に若葉をくゞる山の寺　一枝
恥かしい瞳若葉へ投げかける　ライト
鯉のぼり若葉の上へ舞ひ上り　良夫
納稅の道へ若葉がかほるなり　岩石
バス捨てゝ若葉の道を歩むなり　美佐男
思出はつきず若葉へたそがれる　岩石
汽車辨の白さへ若葉迫るなり　豆秋
同情を買ふ氣の聲が高くなり　岩石

同情を強ひられてゐる戎橋　寛柳
同情の中に首席で通して來　同
同情をしてゐて汽車に乘りおくれ　變人
インチキと知らずに同情してるなり　同
同情はするがと檢事論告し　白峯
帳簿の上に同情されてゐた　同
同情をしてゐるだけのことであり　よしみ
同情もされて櫻の散る姿　白峯
同情へ釣をくれとも言へぬなり　ライト
軍旗の春をほめてる　握り飯　白峯
握り飯明日も働く氣で出かげ　同
一人ぼち砂を握つて遊ぶなり　豆秋
一錢を握つて電車通を越へ　同
今日こそと握るバットに意地があり　變人
月給を握り市場へ廻るなり　同
握つてる指を伸ばして子を泣かせ　同
榮轉を眞正面から握られる　岩石
色眼鏡見られたらしい門を出る　變人
色眼鏡　未亡人と言ふ人の口　同
おついたち生駒へ詣る色眼鏡　豆秋
色眼鏡心齋橋を又かへり　岩石
支配人こちら向ひてる色眼鏡　豆秋
思ひ切り上げた鐵槌自信あり　岩石
朝の自信が夕方笑はれる　變人
自信ある顏を大きく見て戻り　ライト
ふと自信ついた手紙の墨の色　白峯
自信ありウエートレスに通ひつめ　豆秋
自信あるやうに患者を落ちつかせ　變人
宰棒もせよと自信のふところ手　白峯
バイオリン食はねばならぬ指の先　變人
バイオリン見へそうな目で彈いてゐる　寛柳
バイオリン保險勸誘員がくる　豆秋
云ひきれぬ戀へもちだすバイオリン　岩石
バイオリン女は本を賣りはじめ　よしみ
バイオリンビールも酒も呑みほして　白峯

川柳雜誌社　**松江支部句會**（松江）

四月五日夜　於みどり喫茶園　山川兒報

櫻、禁酒、閑、切手

櫻滿開忙しい御榮轉　大鳥
櫻々我が心臟に異狀あり　山川兒
禁酒すれば彼方此方の花だより　笑鬼
禁酒した眼に靜かなり朝ざくら　天痴人
アドバルーン大東京の空は閑　笑鬼
お茶ひいて春三月の花かゐた　山川兒
閑にゐる人閑を盜む人　大鳥
湯の宿で切手をもらふ用が出來　一湖
切手きちんと授書に慣れた碗名書く　天痴人

尼崎支部句會（尼崎）

五月八日　於住友伸銅鑛業所

橋本路風報

待ち人、特急、果物、利子、大望、床柱

客はどうなろうとカーブする特急車　遠見路
紋日だけ特急停る驛になり　路風
特急車懷古の町を見損ひ　素路
特急が來てあつさりと立別れ　四一
特急車降りて走るか父危篤　靜雲
特急へ鳶も烏もあわてゝる　春雄
構内の櫻散らして特急車　美知夫
勤めに行くと見られ度ない特急車　南濃路
子を持たぬ家に果物實りぎす　古寺樓
盛りみかんきづのあるのは中にされ　路風
リンゴすりつぶして愁ひの中に母　美知夫
幾分はリンゴに賴る榮養價　春雄
梅雨上り果物の數よみ直し　紫浪
果物の味考へず戀に居る　南濃路
果物を剝く鉋丁に集る眼　靜雲
果物がさゞいて國を思ひ出し　今田
靈前へ置いてもリンゴ派出に見え　穗夫
バナナ籠新鮮すぎて食へもせず　素路
果物屋產地も云ふて賣つてゐる　四一
果物屋病名までも聞かされる　同
果物屋又崩されて賣れて行く　榮句坊
日が暮れて果實の赤し病める身に　力夫
果物の走りへこわいものときめ　辛雅
純情を失つた手でリンゴがむけ　力夫
果物はみがく手付で並べられ　辛雅
クレヨンを力まかせにリンゴ書く　遠見路
利廻りを話せば伴逃げて出る　遠見路
元利合計バチ〳〵と人の金　同
利廻りに惱む尻から子が使い　同
親友だ利子等不要ぬ金を貸し　古寺樓
拂下げ二錢の利子に暇がされ　同
この利子が從業員の手當なり　路風
借金と預金は利子が喰違ひ　古寺樓
利子で喰ふやつだと蟲の樣に言ひ　辛雅
利廻りを云ばすラヂオは鳴つてゐる　川舟
利子記入されて通帖春を知る　南濃路
子を產んだ產んだと金の話なり　辛雅
働いた金に利子などつけさゝず　南濃路

▼前號は豫想外に好評だつた。有難う。雜誌を出してゐる者にとつて、い〳〵意味の反響位うれしいものはない。一層の御支援を乞ふ。

▼雜筆の頁が段々賑やかになつて來た。前號の亞鈍君の手嚴しい抗議をのぞいては、すこしくのんびりしすぎてゐるやうだ。本號でも、まづノンビリ派の錚々、葭乃、民郎が筆を執る。中庸どこの柳石、山雨樓、久留美の諸君が書く。ケンゲキ派も少しは動いて一抹の涼味を送つて欲しい。艸樂君が「桃太郎さん」を書いたら、民郎君が「桃太郎序曲」を書いて來た。明治の子は桃太郎に育てられたが、近ごろの子は黑兵衛なんかに育てられて、桃太郎にそれほど親しみを感じないやうだ。桃太郎研究も今のうちにしておかねば忘れられてしまうだらう。

▼「異國に住めば」は「街に住めば」の延長で、句に文にエキゾチックな匂ひがしてうれしい本號で全部發表する豫定であつたが、編輯的効果から數回に分割して續載することにしたので未載の方は諒とされたい。本號へは奉天の石原青龍刀、小倉圓平、天津の和田默然人三君の句と文を發表することが出來た。味讀を乞ふ。

ちゃんとんかつ
湖同
ちゃ地法善寺境内

▼本誌の異色として好評を博してゐた「行路集」も本號で完結した。

▼「柳誌要目」へ本誌の要目も入れることにした。

▼「指導講座」の塚越君、猫の課題に、自家の愛猫に就いて詳述する。そこだけ讀んでゐても面白く讀める。うちにも春ごろには親子六疋ゐたが、近ごろは宅に親子二疋、書齋に黑の仔猫が一疋ゐる。うどんやの親爺が、黑猫はゼンソクの禁厭になるので高く賣れますと、ベンチヤラを云つて歸つたが、どうまじないになるのか判らない。ゼンソクにきくのであれば、省二君に贈りたいが、何か據りどころがあるのか知ら。愛猫家が猫を坐右からしりぞけたら病氣が癒つたといふことは新聞で讀んだことがある。

▲原稿が輻輳して、どうしても盛り切れないので、心やすだてに「川柳塔」を二段組みにして兎に角呼吸をついた。會社の電車だと社長でも立たされるやうなもので、少々の御辛抱をお願ひする。

柳誌要目（五月號）

▼武玉川三編研究（五）
秋の屋・東魚・省二川柳雜誌）

▼川柳名句評釋（一）
麻生　路郎（川柳雜誌）

▼日本名所名物川柳（京都の卷）
山川紫明選・朝賀大鱗畫
（川柳雜誌）

▼鑑賞十句（四）（柳樽初篇から）
櫻井　六葉（梅　鉢）

▼作句による眞我の建設
堀口　塊人（昭和川柳）

▼「柳多留」序文の研究
前田　雀郎（せんりう）

▼柳樽寺今昔物語（四）
小池蛇太郎（湯の村）

▼柳　味　生　活
花岡　百樹（番　傘）

▼文化勳章と文學
鈴木小寒郎（芥子粒）

▼柳多留七篇の句の出所
水木　眞弓（三味線草）

▼川柳の飜譯に就て
阿部佐保蘭（川柳きやり）

▼十年以前の句と人
島田雅樂王（氷　原）

▼或るダンスホールにて
三條東洋鬼（ふあうすと）

▼柳界獨歩の大窪文芳君の肝煮りで名古屋に支部が出來た。そして錚々たる柳人總出の來援近代名古屋人のいゝところを遺憾なく見せて貰つた。幹事は名古屋在住の不朽洞會員吉田水車君である。大阪から出席したのは私と不朽洞會員の白峰、ライトの雨君だつた。名古屋、犬山、桑名の柳人諸君の好意を深謝してゐる。

▼いつ汽車で通過しても、うれしいのは伊賀の山路である。蕉芭が出たのも故なきではない。シートの上に寢轉んで、車窓から山ばかり眺めてゐた。

▼山路の田植も風情のあるものの一つだが、

道問へば一度にうごく田植笠

の時代とは、よほど距離が出來てしまつた。赤い襷も稀にしか見られない。田植唄も聞えては來ない。娘さんたちは工場かカフエーへ流れてしまつたのであらう。時代は遷るの感が深い。

▼名古屋の畫を歩く。東京や大阪の延長のやうな街が殖えてゆくばかりの中で、今でも商店の帳場にお内儀がガーンと構へ込んでゐる店をチラホラと見た。忘れられない名古屋の姿である。

▲前號に多少の誤綴があつて、御迷惑をかけたことをお詫びする。落丁や誤綴を發見された時には御遠慮なく返送を乞ふ。

▲日に日に迫つて來る暑さを、海に山に、鮎にビールに、征服されんことを祈る。（路郎生）

川柳雜誌社

七月例會

夜七時　7　七月

會場　誓得寺（電南四八八六）大阪市電清水町停留所一丁北ノ辻西入

兼題　『他國』三句　路郎選
『寢臺』三句　艸樂選

柳話　川柳味の多角形　麻生路郎

會費　二〇錢（川協會員章提示の方は一五錢）

呈賞　兼題天位に粗品を呈す（出席者に限る）

乞鉛筆持參

川柳雜誌社

大阪玉出本通三・電話天下茶屋二五七九

幹事　綠雨・豆秋・小柳子・よし江・里十九

社告

▼川柳雜誌社廣島支部の鳥生古弗君が六月から不朽洞會員に入會された。（不朽洞會）

▼川柳雜誌社名古屋支部を名古屋市中區板橋町二ノ六二吉田水車君方に設置、吉田水車君に幹事を、大窪文芳君に支部相談役としてお世話を願ふことなつた。

川柳指導講座

本社の指導講座は平易懇切、全く手を取らんばかりにしての講座振りです。川柳を作りたいが、どうしたらいゝかと迷つてゐる閑に、五七五中心に、課題によつて作り、本講座へ送られるのが捷徑です。

講師　塚越正光先生
課題「戀」一人一句
締切　七月廿日

本社宛「川柳指導講座句稿」と明記する事

▼本社螢ケ池支部は一時閉鎖することにした。

社關係の人々（いろはは順）

川柳雜誌社

主幹　麻生路郎

賛助員

池澤樂居　國枝史郎　大島濤明　窪田銀波楼
藤村作　安川久留美
長谷川一徹　藤本卯之助　大谷五花村　大西長三郎　前田雀郎
大道弘雄　穎原退藏　小川武　前田五健
岡本一平　赤井清司　亀井晟修　食満南北
片岡直方　淺田一　川上三太郎　柴谷宰二郎
笠原路生　末弘嚴太郎　川村花菱　篠原春雨
嘉納純　米村あん馬　蛭子省二
田中辰二　田村孝之介　藤里好古
長崎柳秀　伊藤彦造　谷脇素文　小林不涙人
長岡半太郎　鳥山一歩　生方敏郎　森東魚
長野晴濱　沖野岩三郎　高尾亮雄

不朽洞會員

橋本緑雨　岩崎柳路　大西八歩　毛利九波
高橋かほる　北山悟郎　須崎豆秋　中西おさむ
水谷鮎美　春元紀太　大鶴喜由
福田山雨楼　朝田新水　松下小柳子　原史風
西田艸樂　姫田夕鐘　西いわを　關本雅幽
永田里十九　村松夢裡　後藤宵兒　江戸みつる
山本丹路　市塲沒食子　宮岡白峰　近藤勇
生田翠夢　吉田水車　明石柳次　加藤ライト
★　妹尾變人　石曾根民郎　鳥生古弗

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）　庄萬よし
九三會支部（大阪市）　北山悟郎
神戸支部（神戸市）
函館支部（函館市）　亀井晟修
高知支部（高知市）　國澤春水
梅田支部（大阪市）　水谷鮎美
田邊支部（和歌山）　辻左馬
簸川支部（島根縣）　尼綠之助
京都支部（京都市）　明石柳次
鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州
松山支部（松山市）　酒井大樓
御旅支部（大阪市）　江戸みつる
天王寺支部（大阪市）　須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）　宮岡白峰
御池橋支部（大阪市）　西いわを
松江支部（松江市）　勝谷山川兒
大鐵局支部（大阪市）　山本喜山
西條支部（愛媛縣）　荒井英賀夫
光耀會（大阪市）　竹内機見女
今里支部（大阪市）　市塲沒食子
今治支部（今治市）　月原宵明
笑會（大阪市）　永田里十九
伯耆支部（鳥取縣）　三鴨美笑
光竹原支部（廣島縣）　松井可笑
十三支部（大阪市）　淺野牧人
臺中支部（臺灣）　耕朗
兵庫支部（神戸市）　三崎陽幸
廣島支部（廣島市）　濱田久米雄
名古屋支部（名古屋市）　吉田水車

川・雑・案・内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手代用可）、敬具、寄稿、句會案内、柳書廣告、その他

川・雑・句・箋

「川柳雜誌」への投句は新らしく出來た桝形の美しい投句用箋をお用ひ下さい。

句の書き心地もよいし、選者が選句されるのにも、便利で句の見損じもなく相方に好都合であります。自分の句を尊重される意味からでも御使用をおすゝめいたします。送費は本社で負擔いたします

八十枚綴　一冊　金十五錢
同　二冊　金廿五錢

御申込は川柳雜誌社へ
＝切手代用も可＝

御禮

本社名古屋支部開設に際し格別の御聲援を賜りお蔭樣で創立記念句會も豫想以上の盛會裡に終了致し誠に欣幸に堪えません。句會散會後、主幹の歡迎宴をお開き下されました事をも併せて御禮申述べ今後の御支援と御鞭韃を伏而お願申上げます。

敬具

名古屋川柳人各位

吉田水車
大窪文芳
麻生路郎

合本特賣

川柳雜誌の合本第二卷より第十一卷まで

各一卷　金壹圓五十錢
第十二卷及十三卷　金參圓

送料大阪市内　一冊六錢
市外　一冊三三錢

御申込は前金で川柳雜誌社へ

後の葉柳を頒つ

大正八年に出してゐた「後の葉柳」の殘本が僅かばかし出て來たのでお頒ちします。日車、半文錢、路郎の三氏の句しか載つてゐない桝形四頁もの全三部で十錢、二錢切手五枚お送り下さつてもよろし。

川柳雜誌社宛

懸賞川柳

課題「香水」　七月十日
「飛行機」　八月十日

用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）選者麻生路郎氏秀逸數句に謹謝を呈す

宛先　大阪市西成區玉出本通三ノ三六　麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

殘本分讓

川柳雜誌の殘本が少數宛ありますので、左の通りで分讓申上ます

第二卷より第三卷迄　一冊　十五錢
第四卷より第十二卷迄　一冊　十錢
第十三卷　一冊　二十錢
（送料一冊一錢）

御申込は前金で川柳雜誌社へ

川柳を作る人、愛好する人の必讀誌　毎月一日發行　一部廿錢・送料一錢

川柳倶樂部

東京市牛込區揚場町八
川柳倶樂部社

東海の代表誌
川柳草薙
一部　一〇錢（郵稅共）
一年　一一圓（同）
名古屋市南區八熊町寺田一一五〇
發行所　草薙川柳社

川柳きやり

菊判毎號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四六八
川柳きやり吟社

川柳松囃子

毎月一日發行一部廿錢（稅共）
福岡市下店屋町九
川柳拳骨吟社

菊正宗

宮内省御用達

株式會社 本嘉納商店

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募集

第十四卷 第九號課題

七月十日締切（十句以內）

忘れ物　高須啞三味選

仲人　朝田新水選

第十四卷第十號課題

八月十日締切（十句以內）

庭下駄　梢元紋太選

齒痛　生田翠夢選

毎號募集

近作柳樽（雜吟 廿句）麻生路郎選

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

定價

一部　金三十錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます。但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十二年六月廿五日印刷
昭和十二年七月一日發行

第十四卷 第七號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社　電話天下茶屋二五七九番　振替大阪七五〇五〇番

支社　東京市蒲田町女塚町二〇三　川柳雜誌社東京支社

禁無斷轉載

廣告料

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

賣捌書店

（大阪）大賣捌大寶書店　參文社　明文堂　朝日ビル書店

其他　市內各書店（東京堂）東京堂　嚴松堂　吉岡書店

玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田寶文館（函館）

石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和十二年六月二十五日印刷納本
昭和十二年七月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌（第一六二號）

定價金參拾錢 送料壹錢

にきびとり

美顔水

▲ニキビ吹出物に第一等の良藥！

ニキビ吹出物にこれ程よく効く藥はないといはれ　種々な藥や方法で失望された方でもこの藥の効能には滿足されます。

▲美容藥として

この藥は美容藥としても非常に優れた効果がきり男子方にも婦人方にも廣く賞用せられてゐます。